Ⅲ　調査の概要

１．石垣調査

経緯

丸山城跡の石垣については、早くからその特徴的な構造が注目されてきた。しかしながら、発掘調査は門部分の石垣を中心に行われ、石垣断面の調査はなされておらず、その特徴を十分に考察できる情報は記録・掲載されていない。近年、その重要性が再認識されつつあり、遺跡の評価に重要な問題を内包すると判断し、今回の調査を行うこととした。現地調査は、平成 27 年 12 月 1 日に町教育委員会の湯浅課長、元発掘調査担当者の森口正和と椿の３名で行った。調査は、石垣の比較的遺存状態が良好な地点（第 1 図）において計６箇所の略測断面図（第２図）を作成した。

遺跡の再評価と調査の目的

石垣の特徴については、平成 9 年の発掘調査報告書で北垣聰一郎氏によって詳細に検討されており(1)、「丸山城に採用されたノリをもつ構造体の事例は…安芸地方には存在する。それは…吉川元春館跡遺構である。…丸山城との技術上の関連性は、現在のところ積み方の上からも窺えないのである。」と評価されている。その後、近年になって小都隆氏により丸山城跡の再検討がなされ(2)、石垣や礎石建物、館構造や性格に至るまで重要な指摘がなされた。特に吉川元春館跡や万徳院跡、さらには益田氏の七尾城跡との比較により、丸山城が過渡的な城館でありながら、時代に逆行する山頂立地を選択しているところに遺跡の最大の特徴がある点を、あらためて指摘された点は重要である。

小都氏の再検討は多岐に及んでいるが、特に丸山城の石垣や造成の特徴については、以下のように評価されている。

①大規模な区画造成には石塁（石垣）を用い、三の曲輪や東側山麓からの見た目を重視している。

②石垣は低く、積み方は石材の広い面を立て並べ、立石を間配るなど個性がある。

③門は場所により規模が異なるが、角石は立石と横積みの組合せの可能性があり、それぞれ類似する。

④隅角部や上部が壊されており、破城の可能性がある。

⑤館の設計、規格、造成、石垣や門の石積みなど、全体として吉川氏城館跡で見られる特徴的な技術や工法が観察でき、吉川氏との密接な関係があったことが窺われる。

⑥本丸・西の丸とも東側は見た目も整備されているが、西側は造成が不十分で建物も明らかで無い部分がある。

⑦丸山城の存続年代は天正 11～19 年までの短期間とされているが、築城年代は、仮に吉川氏に関係する職人などが工事に関わったとすれば、吉川氏城館跡の構築・改修年代（吉川元春館＝天正 11 年造成開始、万徳院＝天正 15 年以降石垣に改修）を勘案すると、吉川経言入嗣問題が持ち上がった天正 7 年から、それが白紙に戻る９年までの間に着手・施工された可能性も考えられる。

と、まとめられている。さらに、

⑧この特徴的な石塁は郭の造成と密接に関係し、石塁を築いた後に背後を造成して平坦とし、石塁外面の見た目は石垣となることを（吉川氏城館跡では）基本とするが、丸山城の場合は、石塁上部を完全に埋めずに残して石塁のままとする部分が認められ、特に三

の曲輪に面した部分はそれが顕著である。

と、現地観察による重要な考察がなされている。

石垣調査

今回の石垣調査は、この小都氏の指摘事項のうち、特にこの特徴的な石塁の断面構造について、吉川氏城館のそれと比較するために、外面観察や部分的な崩落箇所の内部観察から、略測断面図を作成することを目的とした。また、周辺曲輪群の石垣については全体平面図以外の情報がほとんど無く、今回はできるだけその石垣も観察して記録化に努めた。なお、12月とはいえ、草木が密生する箇所も多く、時間的制約もあることから、石垣の正面は写真撮影に留め、正面（立面）図は作成していない。石積みの外面は基本的に垂直かそれに近い傾斜であるが、崩落やハラミ部分も多いため、すべての個所でそうであるのかは再検証が必要である。なお、石塁は上部が崩落しており、その状況は確実な上端部が確認できないほど激しいことから、小都氏の指摘どおり「破城」が行われたと考えざるを得ない。

本丸

本丸では、石塁構造が観察できる西辺北端部分の断面図を作成した。この部分は石塁内面上端の石材と考えられる立石列が観察できる部分で、外表面は崩落が著しいが、この立石を重視して測量ポイントに選択した。西側は径１ｍ前後の巨石を含んだ多量の石材が崩落しており、当初の高さは不明であるが、少なくとも立石上端以上はあるものと考えられる。外表面の下端は埋没しているため不明であるが、現状観察から 1.5～2m程度と推定している。外面の崩落部分には人頭大からそれ以上の割石が充填されているように観察され、まさに石塁の名にふさわしい構造と考えられる。

西の丸

今回は測量を行っていないが、三の曲輪側と北門周辺は明かな石塁状に観察され、特に門周りは明瞭である。門の角石も小都氏の指摘どおり大きな割石を立てた立石・横石で構成されている。

三の曲輪

今回、時間的制約から調査を見送った。東側から入城する際に視覚的効果が期待できる場所に石垣が配されており、再確認の必要がある。

四～七の曲輪

部分的に原位置と考えられる石垣が残るが､石塁構造となるかどうかは判断できなかった。とくに四の曲輪は石垣そのものが不明瞭で､北東部の下方に石材がまとまって散在しており、この位置に門の可能性を検討すべきかもしれない。再調査の必要あり。

八の曲輪

崩落が激しいが、転石の量から比較的高い石塁が存在していた可能性がある。北東辺に土塁状の高まりが見られ、良好な石塁構造が残っている可能性がある。未実測。

九の曲輪

この曲輪も崩落が激しいが、低位部側の石垣の本来の高さは２ｍを超える可能性が高い。崩落部分で観察できる石垣の裏側は、本丸の石垣同様割石が多数充填されており、上端部内側の石列となる可能性がある石材（図中のトーンの入った石材）もあり、石塁構造と考えられる。

十の曲輪

この曲輪は曲輪群の最下段に位置し、一見すると東西に長い帯曲輪状を呈しているが、実

際には西側の広い区画（西区）と東側の奥行きの狭い区画（東区）に段差を付けて分かれている。

東区では、縁辺部に明瞭な土塁状の高まりが認められ、その内側に部分的であるが石列が確認できる。石列の石材は基本的に板状石を立て並べた状態で配されており、土塁の高まりの外側下方では２～３段の石積みが確認できる。転石には径１m近い大型の石材も認められる。実測図の断面形態でわかるように、石塁構造となるものと考えられる。

西区の石垣は、他と状況が異なり、乱積みではあるが、割石を比較的丁寧に垂直に近い角度で約 1.5mほど積み上げている。また、石垣上端部には板石を水平に積んでいるように見受けられ、その背後には奥行き１m余りの犬走り状のテラスを設け、さらに上方は石垣の無い高さ約 2.5mの土斜面となっている。また、この斜面上端は土塁状の高まりに見える部分もあり、全体として下段を石垣（石塁の可能性あり）、上段を土塁の二段構造をもっている可能性がある。この二段構造は今回の調査で唯一認められたのであるが、他の部分でも再確認が必要である。

十一の曲輪

曲輪は南北に区分される可能性があるが、判然としない。断面図は立石列を伴う土塁状の高まりが確認できる南側部分で作成した。現状で立石が確認できる部分はわずかであるが、平成 2 年度の試掘調査で作成された平面図には、曲輪外縁部の北辺にも同様の石列が認められるほか、南端では石積の門構えが記録されている。この門については、関係者の話で間違いなく存在していたようであるが､公園管理道建設の際に大部分が壊されたものと考えられ、現在はその一部石材が残るのみである。

石垣外面の石積みは２～３段確認でき、上部は崩落していると考えられる。他と同様、上端部内法が立石列となる石塁構造と考えられる。

十二の曲輪

今回の調査では石垣が確認できなかった。発掘調査報告書では、地形図には石垣表記が見られず整合するが、縄張図には明確に表記（特に登城道部分の両側）されており、再調査する必要がある。また、北半は十の曲輪西区で見られた上段の土塁状構造となる可能性も検討すべき点である。

小結

以上、各曲輪の石垣について個別に記してきたが、いわゆる石塁構造をもつ石垣がこれまで指摘されていた本丸・西の丸のみならず、大半の曲輪で認められた点は大きな成果であった。最終的には発掘調査による検証が必要となるが、崩落部分に見える石材充填の様子や、石塁上端部の内側を立石列に仕上げる造りなど、外面の石積みの共通性だけでなく、断面形態においても吉川元春館の石塁構造と極似することを確認できた。

また、曲輪群周辺には随所に露岩が見られ、割石を採取した跡と見受けられる崖状部分も存在するが、さらに石垣の崩落石とは考えにくい量の石材集中部分もあることから、石材採取や造成のありかたを検討する調査も必要であろう。このことは、小都氏の指摘にある「破城」や「築造途中の可能性」とも関係することから、今後の大きな課題でもある。

小都氏によれば、吉川元春館跡や万徳院の石塁の性格は、境内地造成のための土留め的な役割と外面の視覚効果を目的とした機能を持つことに集約されるようである。また、元春館跡の当初の造成が、施工外縁部に土留めのための土塁を形成した後に実施され、後に石塁構

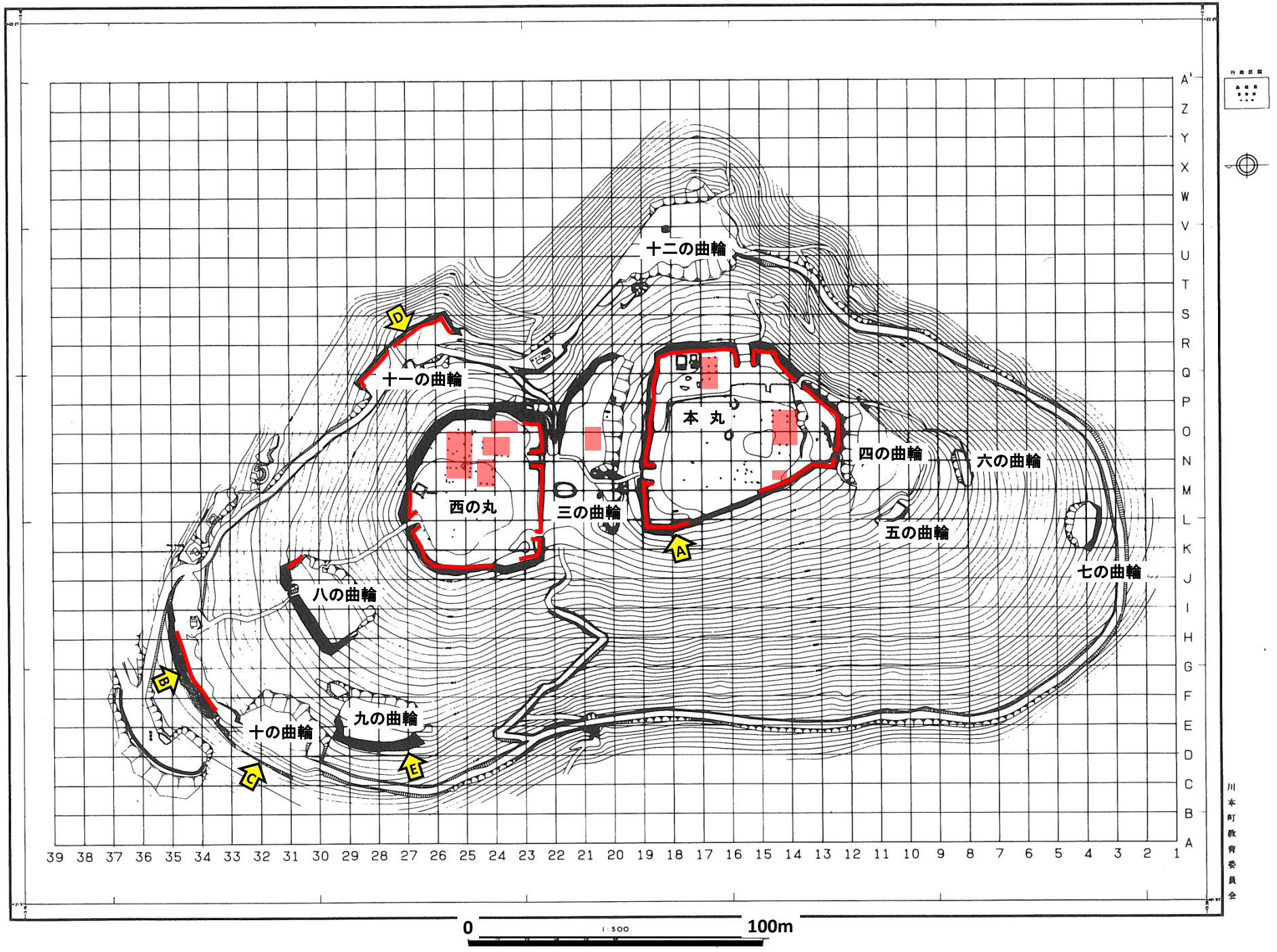
築を伴う工法で改修したと理解されている。氏は、丸山城にもこの石塁を伴う造成工法が行われた可能性が高いと見て、地形上の制約から造成が行き届かない部分は石塁の上部が埋まりきらなかった（結果的に石垣背後に溝状の窪地を残す）可能性を指摘している。今回の調査でもそうした視点で本丸を観察したが、氏の指摘どおり低い部位では石塁上部がそのまま残っているように観察され、完全に埋まりきっている高い部分は平坦で「塁」となっていないことが確認できた。ただし、以下で述べるように石塁はその上部施設である塀との関係で考える必要があり、石塁上端部をできるだけ水平に施工することが目的であれば、必ずしも石塁上端部まで埋める造成を必要としなかった可能性もあると考えたい。石塁上部の立石列は視覚効果を狙った可能性も十分あり、そうであれば、当初より埋める意識はなかったと考えられるからである。この点は元春館の同様な立石列が完全に埋められていたかどうかにも関わり、今後の検討課題としておきたい。

また、元春館の石塁上には築地と考えられる土層が確認されており、板葺き塀の存在が確実視されているようである。丸山城跡においては、石塁上部は破城によりほとんど失われており、築城当初の状況確認は困難であるが（ただし、発掘調査時の写真を見ると、少なくとも本丸の東大門石垣の上部に厚い土層が確認できる）、その類似性から築地や板葺き塀の存在を想定すべきであろう。もしそうであれば、本丸や西の丸の居館部分のみならず、同様の石塁が確認された周辺曲輪群の大半も板葺き塀で囲まれた「屋敷地」である可能性が出てくる。このことは、丸山城全体の構造を山頂の館と周辺の屋敷群として見る視点(3)を提供することとなり、家臣団の居住域が存在するとなれば、遺跡の性格を考えるうえでこれまでの評価を見直す必要もある。

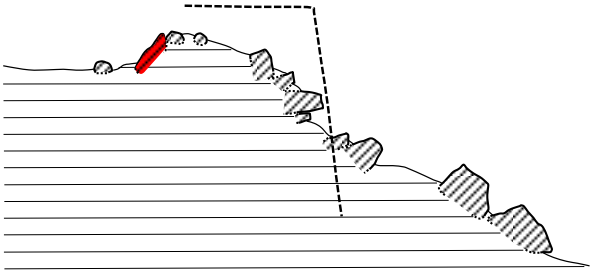
(1)北垣聰一郎「石見丸山城とその石垣について」『中世城郭発掘調査報告書 石見小笠原城郭 丸山城跡』1997 年 3 月、川本町教育委員会

(2)小都隆「石見丸山城跡の再検討」『西国城館論集Ⅱ』2012 年 11 月、中国・四国地区城館調査検討会

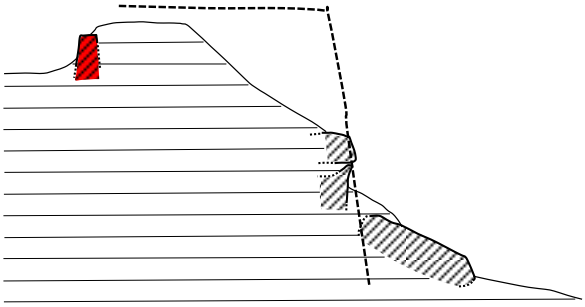
(3)平成 2 年の試掘調査（附編参照）で十二の曲輪より陶磁器類とともに火鉢が出土している。火鉢は床置き使用が一般的とされ、床をもつ建物が存在していた傍証とされる（次節「出土品調査」参照）。



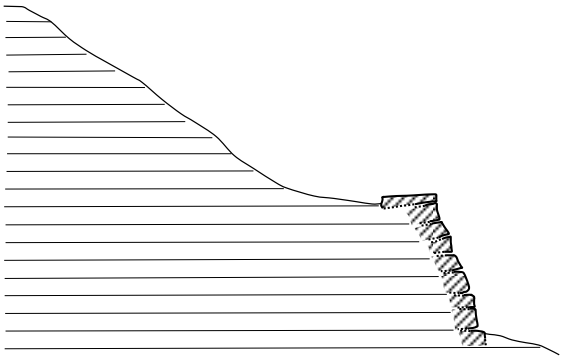
第1図　丸山城跡全体図（矢印が石垣・石塁測量位置、黒塗り部は石垣、赤線部は石塁状の石垣。周縁道路は公園管理道）



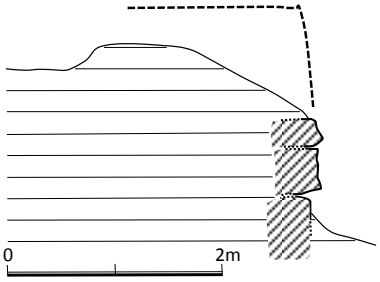
丸山城跡本丸（A地点）



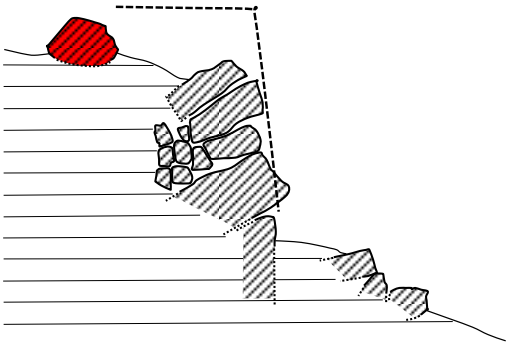
丸山城跡十の曲輪東側（B地点）



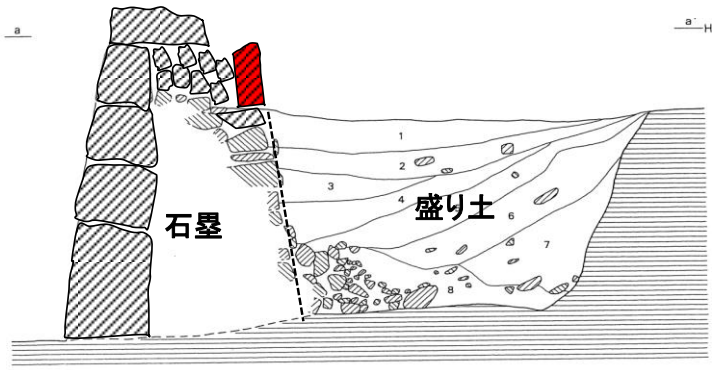
丸山城跡十の曲輪西側（C地点）



丸山城跡十一の曲輪（D地点）



丸山城跡九の曲輪（E地点）



吉川元春館の石塁（SV001）模式図(発掘調査報告書より転載、一部改変）

第2図　丸山城跡と吉川元春館跡の石塁状石垣の断面比較図

２．出土遺物調査

遺物としては、兜の鍬形１個や銭貨（洪武通寶１枚、無文銭１枚)、鉄鍋３片などの金属製品をはじめ、陶磁器、土師器、瓦質土器が表のとおり多く出土している。既に、詳細な報告書があり、本稿では陶磁器、土師器、瓦質土器の出土場所や組成、および陶磁器の時期について少し言及したい。

（１）土器・陶磁器の出土状況

陶磁器、土師器、瓦質土器は、本丸跡と二の丸跡（西の丸跡）および一部トレンチ調査が行われた十一の曲輪と十二の曲輪において発見されている。本丸跡では 26 片、二の丸跡では 144 片、十一の曲輪では 37 片、十二の曲輪では 35 片である。その多くは二の丸跡の礎石建物付近から出土しており、全体の 44%を占める。土師器と陶磁器は多く、器種も多様である。一方、曲輪の面積に比べて出土量が少ないのが、主要部の本丸跡である。発見されているものは全体の 8%しかない。また、土師器皿は１片のみで、国産陶磁器は出土していない。大型の礎石建物１棟が確認されている主要な曲輪でありながら、出土品は僅かである。一方、二の丸跡では、複数の礎石建物跡と二連からなるカマド跡が検出され、土器・陶磁器も多く出土しており、日常の生活空間があった場所と考えられる。

（２）土器・陶磁器の組成

土師器には、皿、鉢、鍋がある。出土数量は全体の 4 割を占め、中でも多いのが皿で、102 片ある。（注 1）その内、9 割が底部に糸切り痕を残す在地産のもので、京都系といわれる手捏ね土器は僅かである。（注 2）他の器種としては、鉢がある。暖房具の火鉢も含まれる。火鉢は方形の低い型のもので、口縁の外内面には花や菱形のスタンプ文が施されている。また、煮沸具の土鍋も２片混じる。

中国産の陶磁器は 158 片ある。全体で４８％を占め、その内の 9 割が青花の碗と皿である。内訳は、景徳鎮窯系が 117 片、漳州窯系の粗製青花が 26 片ある。白磁は 9 片と少なく、さらに、青磁については 15 世紀代の龍泉窯系碗が１片ある。これは骨董的なものであろう。出土量が少ないのが、中国産の瑠璃釉小皿と朝鮮王朝産瓶で、個体数としては 1 個分である。また、国産品も少なく、備前の大型の壺が 2 個体分、瀬戸美濃の天目が 3 個体分の破片が出土している。この天目の存在により、日頃より茶の湯を行っていたことが分かる。

なお、中国製の天目や香炉等の床飾り等の威信財は発見されていない。また、遺物量も少ない。これは丸山城での生活期間が短く、かつ合戦に伴う籠城も無かったためであろう。

（３）陶磁器の時期

陶磁器の組成を見ると、青花が貿易陶磁全体では９割を占める。広島県北広島町の吉川元春館跡や吉川氏の菩提寺である万徳院跡でも青磁が少なく、青花が多く、丸山城跡と同様な組成となっている（注 3)。また、青花では漫頭心（E 群）の碗が多く、皿でも口縁部内湾する E 群が多い。産地では、景徳鎮窯系が多いものの、粗製の漳州窯系のものもある程度含まれている。さらに、瀬戸美濃の天目は 3 個分あり、共に大窯第 3 段階後半にあたる（注 4)。これらの点から、丸山城跡出土の陶磁器の時期は 16 世紀第 4 四半期に当ると推

定される。

注

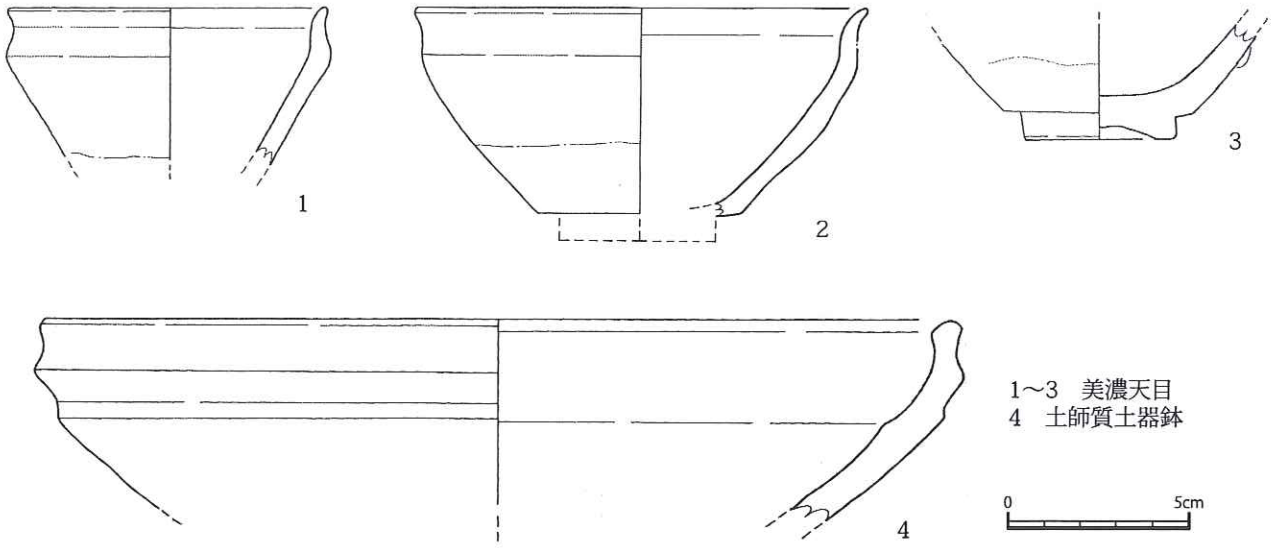
1　丸山城跡の場合は、土師器皿の出土量が他の城館と比べて多いとは言えない。吉川元春館跡では 95%に及ぶ。これは儀礼に伴う宴で、土師器皿が多用されたことを物語っている。

2　石見部においては、京都系土師器皿は限られた遺跡でしか出土していない。

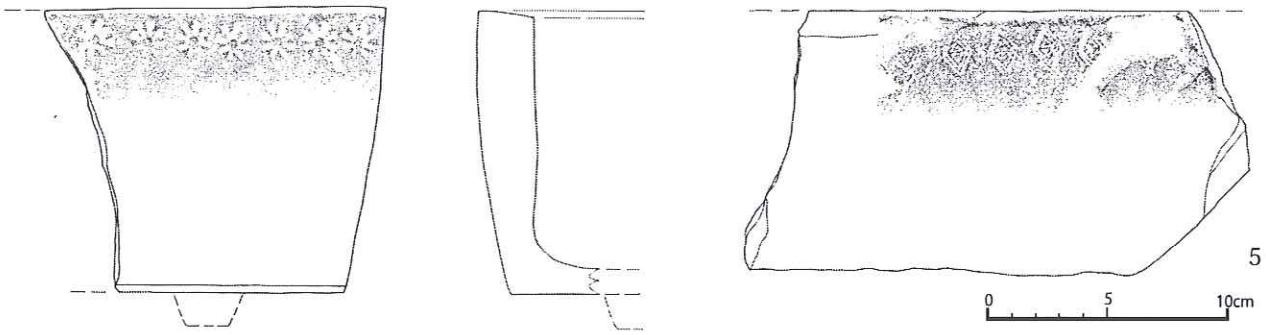
3　沢元保夫 2000「万徳院出土の陶磁器類」『中世遺跡調査研究報告 第１集 』広島県教育委員会

4　『愛知県史　別巻　中世・近世　瀬戸系　窯業２』愛知県 2007

（伊藤　創・西尾克己）



美濃天目・土師質土器鉢実測図



土師質土器火鉢実測図

図　丸山城跡出土陶器・土器

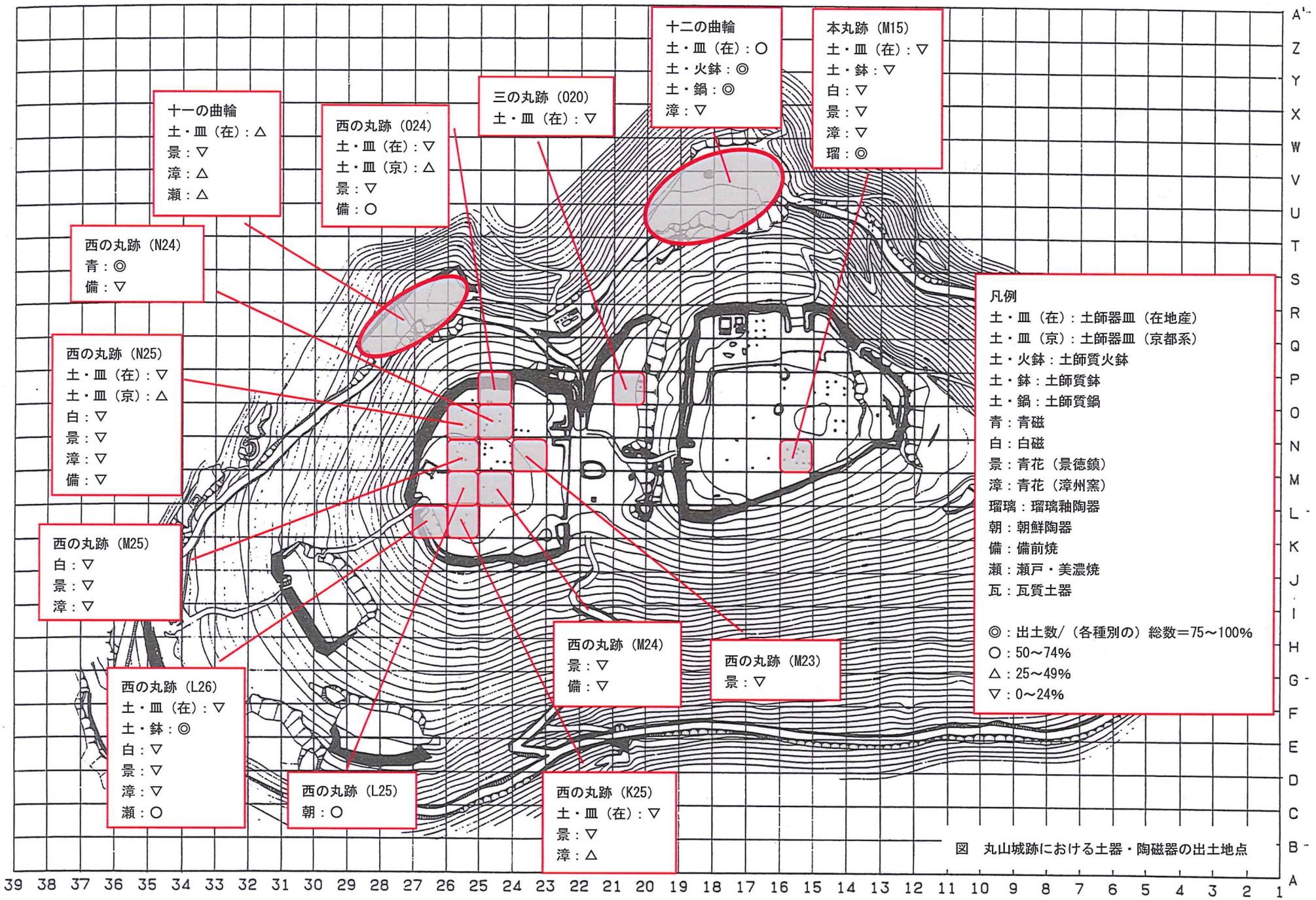


図　丸山城跡における土器・陶磁器の出土地点

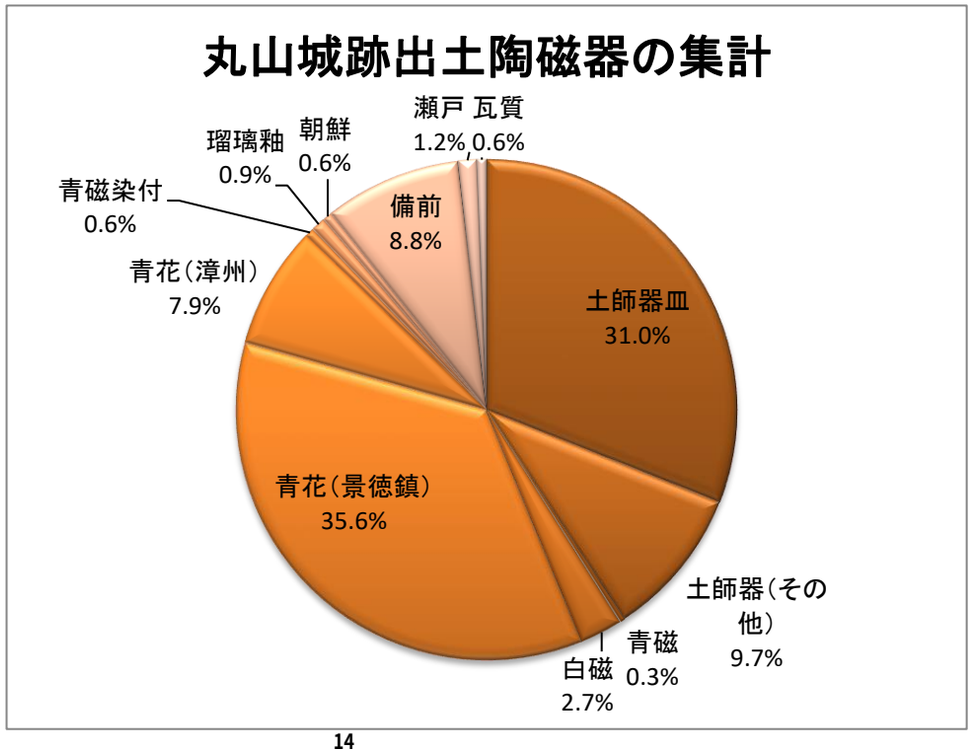
丸山城跡出土青花分類内訳表

No.	地区	グリッド	皿(景徳鎮)				碗(景徳鎮)				皿(漳州窯)				碗(漳州窯)				計
			B群	C群	D群	E群	B群	C群	D群	E群	B群	C群	D群	E群	B群	C群	D群	E群	
1	本丸	M15	1			3				1				1					6
2	西の丸	M23				2													2
3	西の丸	K25				2						1							3
4	西の丸	M25	7																7
5	西の丸	N25				3				1									4
6	西の丸	L26										1							1
7	西の丸	D区				2													2
8	出土地不明					1										1			2
	計		8	0	0	13	0	0	0	2	0	2	0	1	0	1	0	0	27

丸山城跡出土陶磁器集計表

No.	地区	グリット	土師器						青磁	白磁			青花(景徳鎮)						青花(漳州)				青磁染付	瑠璃釉	朝鮮	備前	瀬戸	瓦質
			皿(在地系)	皿(京都系)	火鉢	鉢	鍋	土製品	碗	碗	皿	小坏	碗	皿	小皿	鉢	小坏	小壺	碗	皿	大皿	小瓶	碗	小皿	瓶	壺	天目	鍋
1	本丸	M15	1			1				1			4	13					2	1				3				
2	西の丸	M23												7														
3	西の丸	M24											1													3		
4	西の丸	N24							1																	6		
5	西の丸	O24	4	2										1												19		
6	西の丸	K25	2										2	5		1		1		7	1							
7	西の丸	L25																							1			
8	西の丸	M25									1			12					1				1					
9	西の丸	N25	3	3						2			1	7	2					1						1		
10	西の丸	L26	7			18						2	2	7		1	1			1			1				2	
11	西の丸	D区											1	2														
12	三の曲輪	O20	1																									
13	十一の曲輪	A区	20										6	1					1			8					1	
14	十二の曲輪	B区	25		6		2	1												1								
15	出土地不明		31	3	1	3					1	2	15	21			1			2					1		1	2
16	表採												2															
計			94	8	7	22	2	1	1	3	2	4	34	76	2	2	2	1	4	13	1	8	2	3	2	29	4	2
小計			102					32	1			9						117				26	2	3	2	29	4	2
総計			329																									

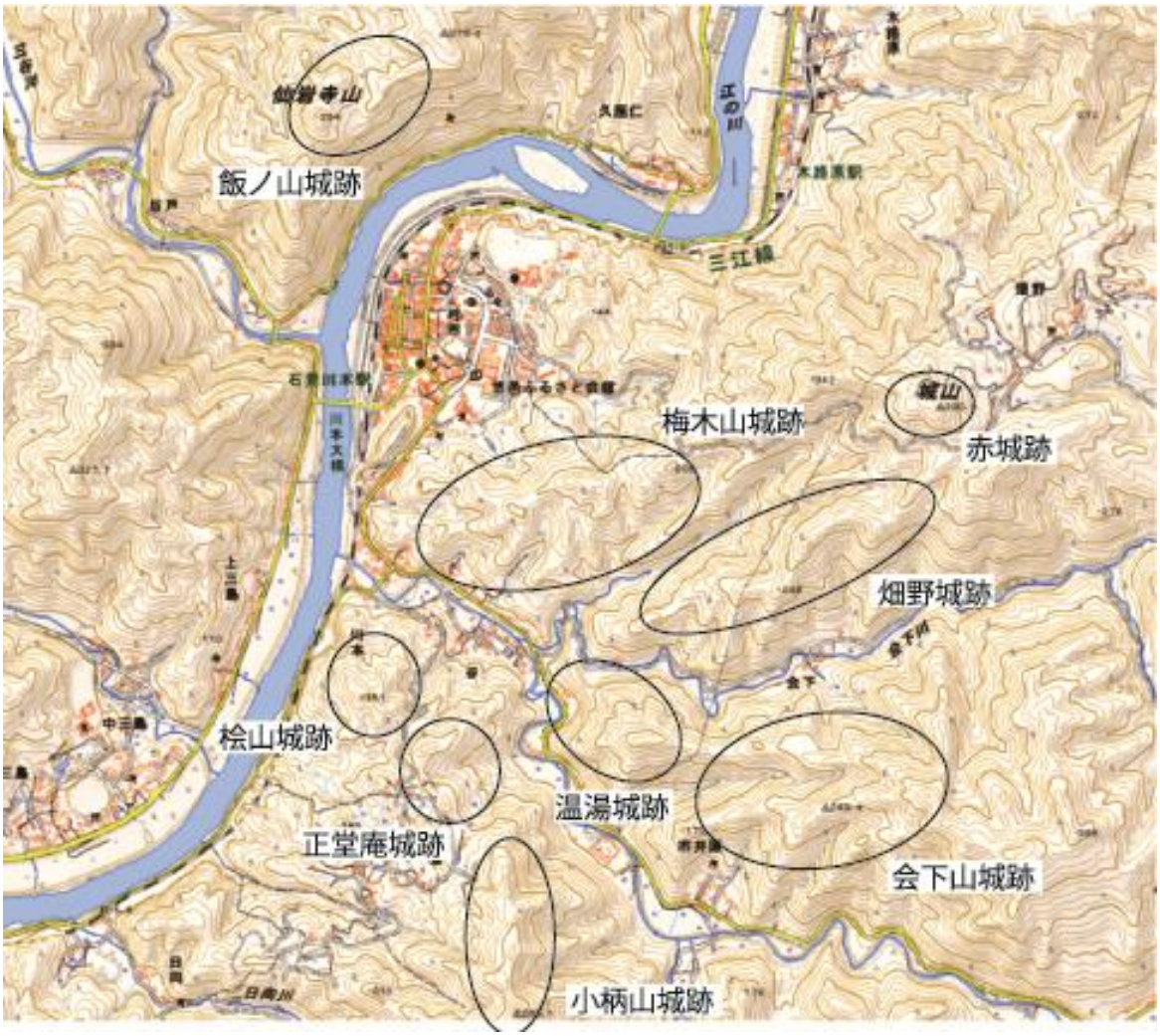
No.	資料名	数量	割合
1	土師器皿	102	31.0%
2	土師器(その他)	32	9.7%
3	青磁	1	0.3%
4	白磁	9	2.7%
5	青花(景徳鎮)	117	35.6%
6	青花(漳州)	26	7.9%
7	青磁染付	2	0.6%
8	瑠璃釉	3	0.9%
9	朝鮮	2	0.6%
10	備前	29	8.8%
11	瀬戸	4	1.2%
12	瓦質	2	0.6%
	計	329	100.0%



３．関連遺跡調査

小笠原氏関連城郭について

ここでは、丸山城以外に小笠原氏が城主、あるいは関わったとされる城郭について取り上げる。　丸山城は非常に得意な構造を持っており、その理由をさぐるひとつの手法として、丸山城以前の城と比較検討することも必要であると考えられる。関連城郭としては小笠原氏の居城である温湯城、初期の城といわれる赤城、丸山城から遷ったとされる日出城（出雲市湖陵町）を取り上げる。また関連して毛利元就が温湯城を攻めた際に陣を構えたと考えられる陣跡についても、新たに踏査した結果を含め報告する。



城郭位置図

温湯城跡

温湯城の位置

温湯城跡は会下、市井原に位置し、会下川と矢谷川の合流点の東側の山に築かれている。ここからは江の川流域を見通すことができる。小笠原氏の居城で赤城から拠点を移したといわれている。永禄２年（1559）に毛利元就に攻められ籠城した後、落城した。

温湯城の構造

主郭を中心に東西南北に曲輪が延びる。城の中心部分は主郭とその東側につづく２郭、３郭である。３郭には櫓台状の高まりがある。その東は急傾斜となり両側に竪堀となって落ちる大堀切がある。北側斜面には竪堀が付属する。さらに尾根筋には３本の堀切が存在する。これより東へ進むと会下山城に続く。会下山は温湯城を見下ろす位置にあり、毛利元就が温湯城攻略に際して陣を置いたといわれる。

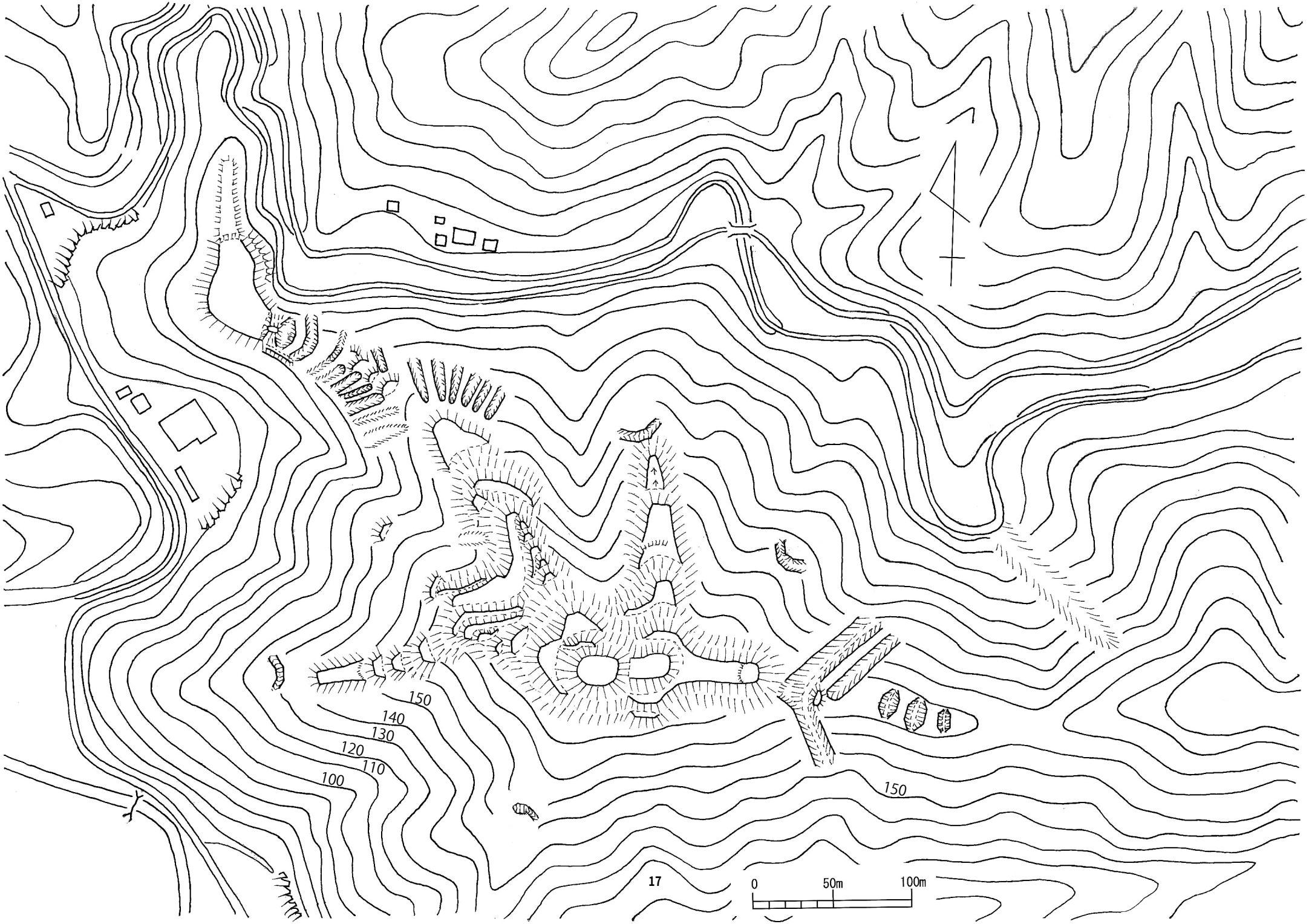
主郭を中心部分から各方面に延びる尾根には全て堀切が施されている。西と北西に延びる尾根の谷間にはやや広い曲輪があり、その上部は細い曲輪が階段状に連続する。この広い曲輪（a）は、通称「バセンバ」と呼ばれている。「バセンバ」は「馬洗場」の字が当てられると考えられる。この曲輪の東側は細い尾根で小曲輪が連続する。また北西の谷側には葛籠折れ状に通路が存在する。その先は確認できなかったが、恐らく谷部分を下っていき、居館と想定されている通称「クラヤシキ」へ通じるのであろう。

さらに北へ下ると、通称「テラヤシキ」（b）と呼ばれる曲輪がある。その北側斜面には畝状空堀群が存在するが、地盤がかなりもろく、現状では判別が難しいほど崩れている。これよりさらに西北に延びる尾根で麓に近い部分が、通称「クラヤシキ」（c）と呼ばれる曲輪である。この部分と「テラヤシキ」との間は何本もの堀切によって遮断されている。「クラヤシキ」の側面は道路によって削られている部分があり、先端部分も不明瞭である。

全体として曲輪の削平状況、切岸の明確化など、普請の状況はよい。特に城の中心を構成する主郭、２郭、３郭のまとまりは良く、それより下位に位置する曲輪とは高い切岸によって差別化が図られている。３郭の東側には、堀切に対して櫓台が設けられるなど万全である。畝状空堀群は一部崩落により識別が難しいが、単独での使用というより堀切との連続、派生で使用されていると捉えられる。

温湯城跡の評価

温湯城跡の曲輪の削平状況、切岸の傾斜など非常に丁寧な普請が施され、小笠原氏の居城にふさわしい。まあ多重堀切や畝状空堀群が存在することも特徴のひとつである。石見地方には畝状空堀群が施された城が多数存在し、江の川をはさんだ対岸にある飯の山城にも大規模な畝状空堀群が確認できる。通称名として「バセンバ」「テラヤシキ」などが確認でき、曲輪の役割を考える上でも貴重である。


150
140
130
120
110
100
150
17
0
50m
100m

赤城跡

赤城の位置

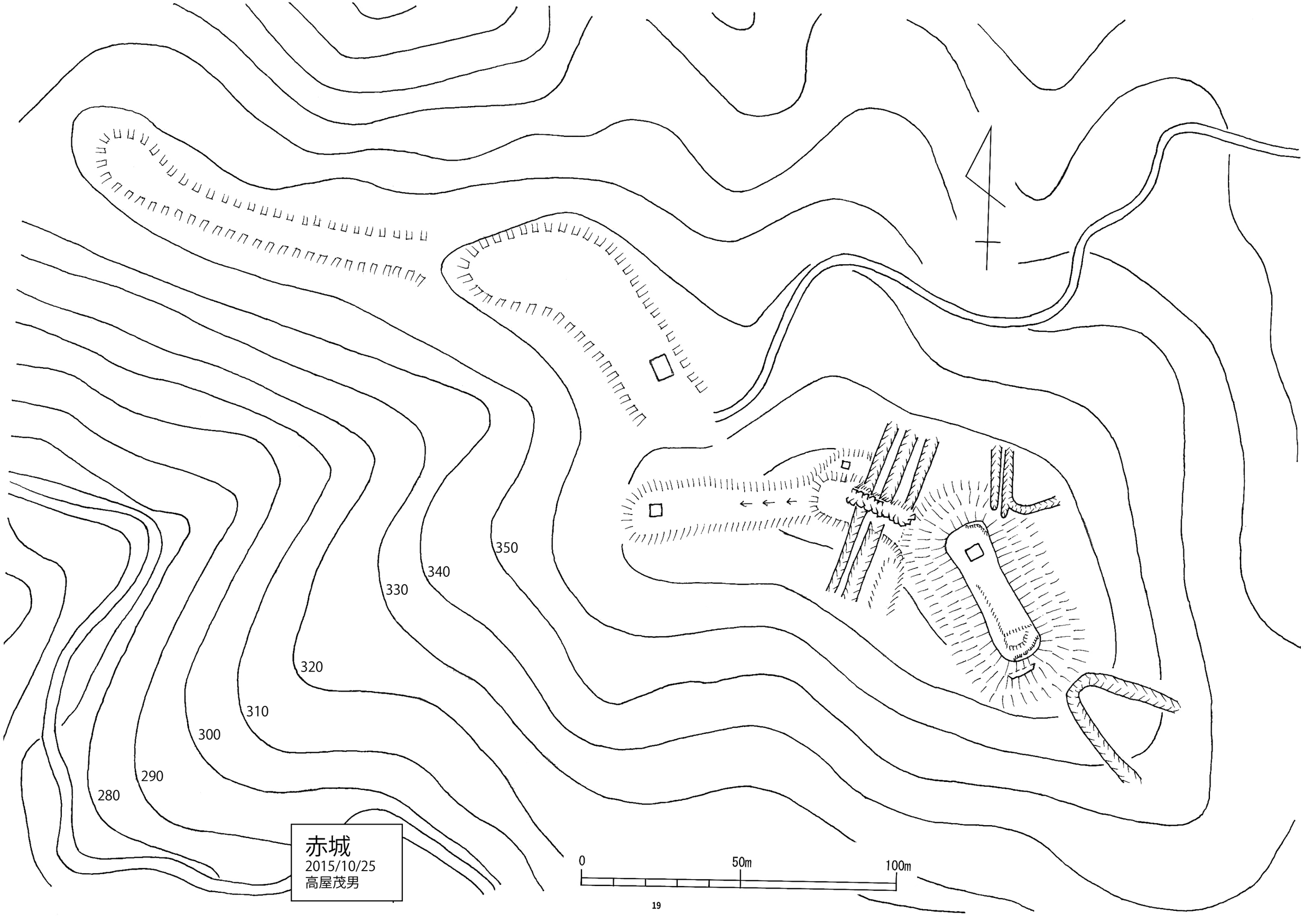
赤城跡は川本町畑野の所在する。現在の川本の市街地を見下ろすことはできず、東の畑野集落を見下ろせるだけである。現在は温湯城の南を石見銀山街道として車道が通るが、赤城側からも川本へ抜ける道があったと考えられ、このルートを押さえる目的を担っていると考えられる。戦国領主がその勢力拡大に合わせて、拠点をより高いところや領域を支配する上で都合のよい場所へ遷地することはよくあるので､この場合も同様に考えてよいと思われる。

赤城跡の構造

城跡は現在公園として整備されており、訪城しやすい城である。中心部分の曲輪は公園化により北側に東屋が設けられている。最も高いところから南北に緩やかに傾斜しており、いくつかの曲輪に分かれる可能性もあるが、公園化による改変もあって判然としない。しかしほぼ単郭の城郭といってよい構造である。曲輪の南端部分は低い土塁が設けられているように見える。北端も同様だが東屋建設に伴う改変の可能性もある。曲輪の南側と北側の尾根には堀切が設けられ、北側のものは補助として竪堀が 1 本付随し上部が連結している。北西側に延びる尾根には 3 重の堀切が確認できる。中央部分は園路によって破壊されているが、竪堀部分はよく残っており、長さ 30m ほど確認できる。深さも現状で 2m はあり、元は倍はあると考えられるので、かなりしっかりとした遮断線が築かれているといえるこそれより北西にはなだらかな地形が続き、さらに 10m ほど下がったラインから、北西側へ向かってなだらかな地形が続く。このあたりは鉄塔が建設されるなど地形の改変も多く、城郭遺構と断定しがたい。主郭直下でしっかりと堀切で遮断していることを考えると、概ね山頂部分で完結する城郭と考えてよいと考えられる。

赤城跡の評価

赤城跡は『陰徳太平記』によると、永禄元年に毛利氏が温湯城攻めに際して、小笠原氏の兵５００が入ったと記す。事実の温湯城の包囲は永禄 2 年と推定されているが、城の規模から考えるとまさしくそれにふさわしい規模で、曲輪周囲を堀切で遮断し、陣を置いたのであろう。西側の自然地形の部分も利用した可能性は残るが判断が難しい。しかし元々、小笠原氏の居城であったといわれるが、規模、構造からして、とてもそのようなレベルではない。しかし堀切の使い方などは温湯城跡と共通する部分もあるが、けして小笠原氏特有の施設というわけではない。


350
340
330
320
310
300
290
280
赤城
2015/10/25
高屋茂男
0
50m
100m

温湯城周辺の陣城について

小笠原氏の居城である温湯城の周辺にはこれを取り囲むように多くの陣城が築かれているが（地図参照）、これらは永禄２年（1559）小笠原氏を攻略した毛利元就軍によるものと考えられる。これらの陣城について考えてみたい。

弘治３年（1557）４月、長州旦山城を攻略し防長における大勢を決した毛利元就は、吉川元春に対し小笠原氏の支城である井原雲井城（邑南町）を攻めることを許している。（卯月４日兒玉若狭守あて書状）註①　また５月９日付け刑部大輔・兒玉若狭守あて書状註②では陣普請について、福屋衆による普請が遅れているようであれば合力すること、それでも人が足りない場合は益田方や吉見方から呼び出しても良いと伝えている。これは井原雲井城に対する付城の普請ともとれるが、雲井城の周辺を踏査しても雲居城北東の掘切に続く尾根上に築かれた小規模な付城と、井原川を挟んだ対岸の尾根上にある陣らしきわずかな削平がみられるだけであり、多くの人手を必要とするような陣城はみられない。つまりこの書状にある陣普請は､井原雲井城攻略に伴うものではない可能性が強いように思われる｡享保１０年(1725)に編纂された「閥閲録」では、註②の文書の冒頭には**石見笠取山**と注記されており，「閥閲録」が編纂された時点ではこの陣普請は永禄２年小笠原氏攻略のために元就が本陣を置いたと伝えられる笠取山と考えられていたようである。

小笠原氏の支城である日和城（邑南町）にはこれを見下ろす場所に大谷山城（吉川山）が、布施城（邑南町）にはやはり城を見下ろす位置に長源寺奥谷城（陣平城）が、宮内城（美郷町）の背後には千本原城が築かれており，毛利軍は敵城の攻略にあたってこうした陣城の構築を重要視していたことが伺われる。温湯城周辺の陣城跡もこうした毛利軍による攻城戦略の一環として築かれたものであろう。前記した文書から、小笠原氏の支城に対する陣城を含め、かなり早い段階から小笠原氏攻略のための陣城の普請が始められていた可能性が考えられる。

会下山城は温湯城に続く尾根上に築かれた付城で、最高所にある主郭①は温湯城よりも120m も高い場所にあり、ここに立てば温湯城を眼下に見ることができる絶好の場所を占めている｡背後にはなだらかな尾根筋が続きかなりの兵を駐屯させることができる空間がある。主郭からは温湯城の方向に２本の尾根が伸びているが、その尾根上には地形に合わせて作られた小さな削平地が延べ１．５Km にわたって延々と続いている。南側の尾根筋の削平地は明らかに温湯城を意識しており、反対斜面に対する防御施設はほとんどみられない。温湯城に続く尾根筋上にも地形に合わせて作られた小さな削平地が続いている。その先端には２重の掘切が掘られており、温湯城側からの反撃を防いでいるほか、②の地点には比較的広い空間が作られておりかなりの兵を置く事ができたと考えられる。その立地から温湯城攻撃の中心的な陣であったといえよう。「陰徳記」註③では小笠原氏攻撃の陣について「五月廿九日（他の資料では２５日）城ノ尾頸笠取山へ打上リ隆元朝臣陣ヲ居候」と書かれており、ここが小笠原氏攻略の本陣「笠取山」であった可能性が高い。註④

小柄山城註⑤は温湯城とは矢谷川を挟んで作られた向城で「陰徳記」では小早川隆景が陣を置いたとされている。最高所からは温湯城を見下ろすことができ、ここから尾根上に小さな削平地が延々と作られている。途中２ヶ所で切れているように見えるが、これは後世の鉄穴流しによるもので、少なくとも正堂庵山と呼ばれているところまでは一連の陣城であり、本

来の総延長は 1.4Km ほどであったと思われる。

これに続く江の川に面した桧山と呼ばれる山の尾根上にも陣城が認められる。他の陣城に比べ自然地形を利用した甘い構造のものであるが、派生する尾根の先端部には必ず２～３段の小さな腰郭が造られている。小柄山の陣城と一体して機能した陣城と考えられる。

畑野城（仮称）は会下谷を挟んで作られた向城で、畑野集落から会下谷入り口方向に向かって伸びる細長い尾根上に作られており、その延長は 900ｍほどである。尾根北東の畑野集落側には２ヶ所の掘切の他土塁も認められる。これは小笠原氏の支城である赤城を意識したものと考えられ、この陣の普請が始められた段階では、赤城は温湯城の出城としての機能が残されていたものと思われる。「陰徳記」には赤城と温湯城の間を切り開き吉川元春が陣を置いたとされており、この記述が正しければ吉川元春が陣を置いた可能性が考えられる。

梅木城（仮称）は温湯城の北西に位置しており、約１Km にわたって尾根上に延々と郭が作られているほか、温湯城に向かって派生する尾根の先端付近まで郭が作られている。註⑥３ヶ所に尾根を切断する浅い凹地が認められるが、これは掘切を作りかけたものの中途で中止したものではないかと思われる。「陰徳記」には温湯城の西に元就が本陣を置いたとされており、その記述が正しければここが元就の陣であった可能性が考えられる。

温湯城周辺の陣城の分布状況をみると温湯城は周囲を完全に包囲されており、物資の補給はもちろん外部との連絡も困難な状況であったと思われる。こうした包囲網は６月下旬頃にはほぼ完成していたであろう事は隆元から貫助八に宛てた書状から伺うことができる。註⑦会下山や小柄山･畑野のような自分の城を見下ろす尾根上に敵が取り付き、日に日に自分の城に迫ってくるという圧迫感は大きな脅威であったと思われる。温湯城を包囲するこうした陣城を築かれた時点で籠城側は動揺し、戦意を喪失したのではなかろうか。それこそがこのような大規模な陣城群を築いた目的であったといえよう。

参考　　陰徳記　石州温湯之城被取囲事

同五月廿日元就朝臣･隆元朝臣･隆景父子三人其勢七千余騎石州へ発向シ給。則吉川元春モ一手ニ成給ヒ、都合其勢一万二千余騎同廿四日温湯ノ城ヲ取囲マル。同廿九日城ノ尾頸笠取山へ打上リ隆元朝臣陣ヲ居給。元春ハ北ノ方一里計隔テ赤城ト云城ニ敵勢五百余騎楯籠ケル。其間ヲ取切陣ヲ堅メ給フ。左衛門佐隆景ハ西表小栖ト云山ニ備後勢ヲ引率シ陣取ラル。城ヨリ西ノ方ハ元就朝臣ノ本陣ナリ。其外宍戸・益田･熊谷･天野･福屋･出羽･佐波巳下一勢一勢己カ陣々ヲソ堅メケル。（以下略）

註① 一　長州旦山之儀落去候而　　（中　略）

一　井原表動之事、此間元春より被申越候、長州之儀相支候者、爰元可為気遣存知おさへ候つるに、今は長州之儀如其調候条、井原表一城之事、近比可然存知候、吉日えらひ候て、一日も頓被取付候て可然候　　（以下略）

卯月四日　　元就判

兒玉若狭守殿　　（萩藩閥閲録）

註② 一　某許普請定昨日相調候哉、さ候而今日至出羽元春可　被討歸候哉、承度候へ、もし普請等不相調候て今日も御逗留候哉、其分者不可然候、福屋衆にて普請遅々候者合力候て、一日も早々可被歸候、さ候はぬは熊兵其外人数等も徒に滞留候間，時分から不可然候、我等も就其爰許徒に在身候間、一日も可被急候へ,又普請は福屋衆可仕候之間、少々不整候共、唯今敵方珍事あるへき儀にあらす候間、御歸候而不苦候へ

一　猶以人数も入申，又覚えにもさせらるるへく候、益田よりも勢衆被呼出候而もくるしからす候へ、吉見方も當座弓箭之武略ニて候ハゝ、何と成共被申候間くつろき候　　（以下略）

五月九日　　元就御印

刑部大輔殿

兒玉若狭守殿　　（萩藩閥閲録）

註③　香川正矩によって書かれた安芸毛利氏の中国制覇を中心とした軍記物。戦国期からは 100 年ほど後に書かれたものであり、年月日や地名などに謝りも見られるほか、史実関係を証明できないものもある。また毛利氏の立場から書かれているので内容についても検討が必要である。

註④　笠取という地名は御湯城の東方１０Ｋｍばかりのところにあるが、この周辺では陣城跡は確認できていない。陰徳記の記述を信用すれば現在会下山城と呼んでいる場所が笠取山と呼ばれていた可能性が強い。

註⑤　陰徳記では小栖山と書かれているが小柄山が正しい。著者が誤ったのか解読・出版時の誤りかは不明。

註⑥　梅木城の尾根筋の先端近くは構成のカンナ流しと耕地化により大きく破壊されている。多くの郭が失われているものと思われる。

註⑦　（前略）就中此口之儀至小笠原執還候、端城之儀至江河間落去候，相極家城一所候、種々雖懇望候、存念之儀候間可打果覚悟に而候、不令許容候、（以下略）

六月廿一日　　隆元印

貫助八殿　　（新修島根県史）

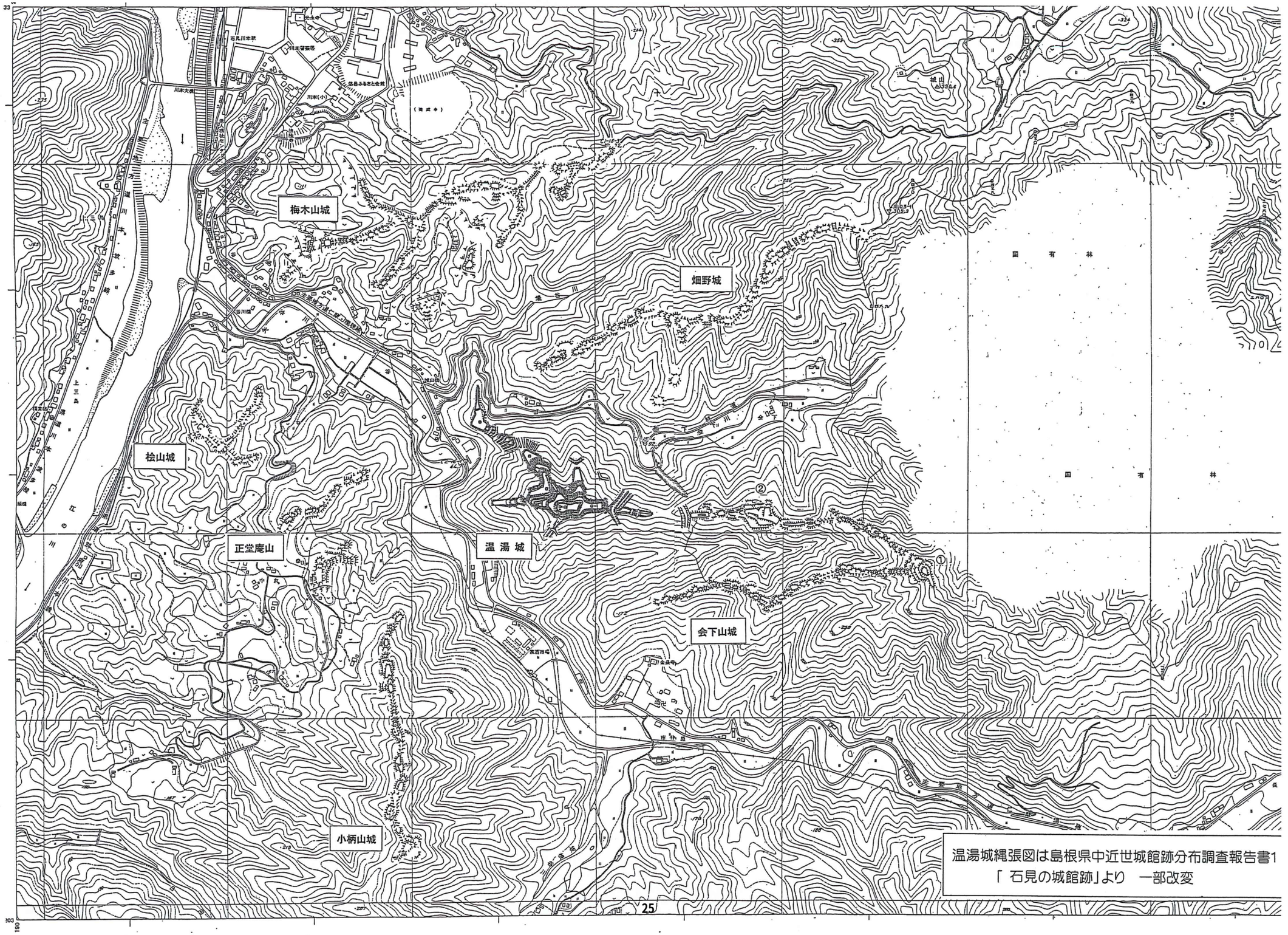
会下山城連続掘切

畑野城郭の一部

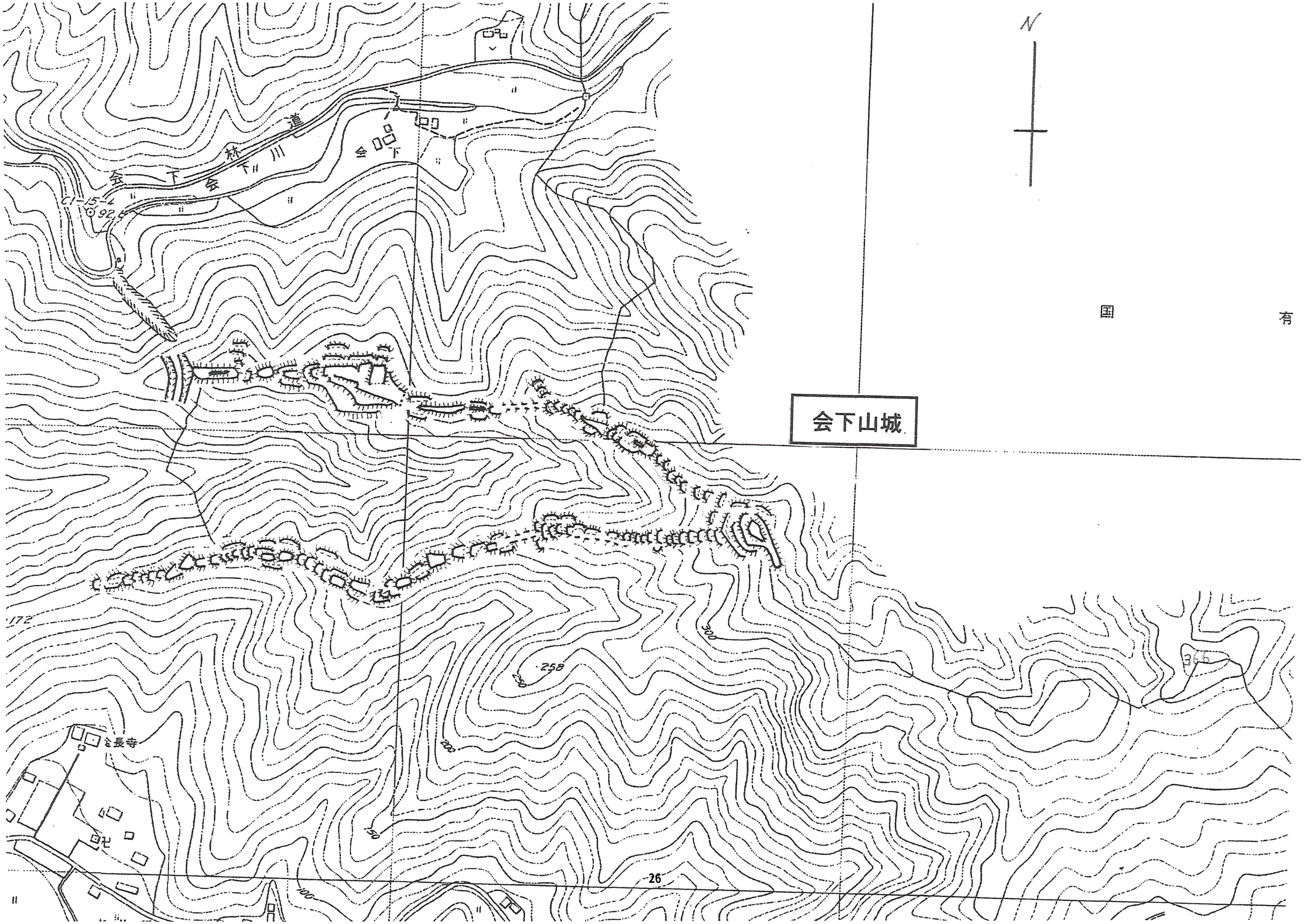
畑野城郭の一部

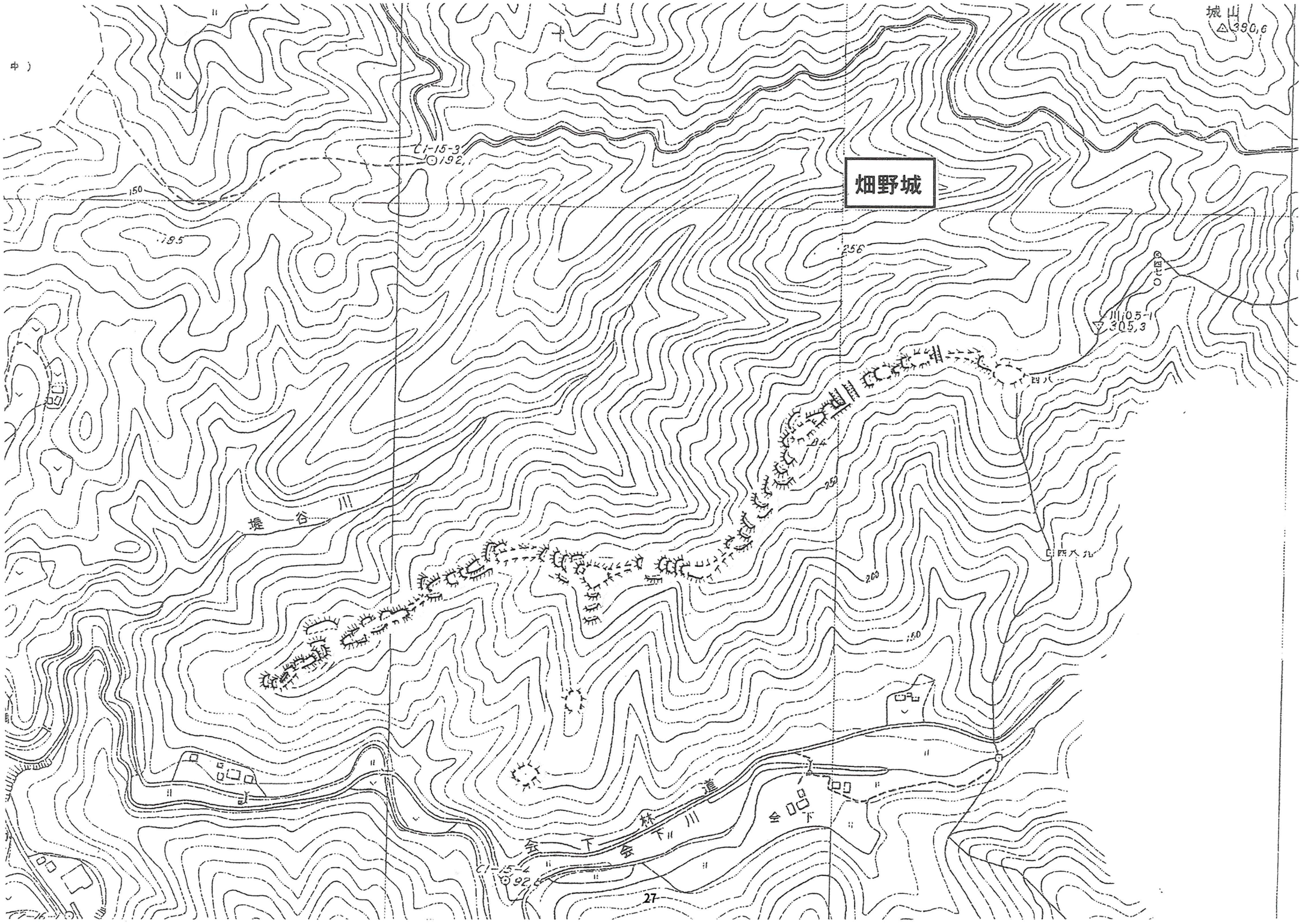
梅木山城郭の一部

梅木山城郭と掘切？

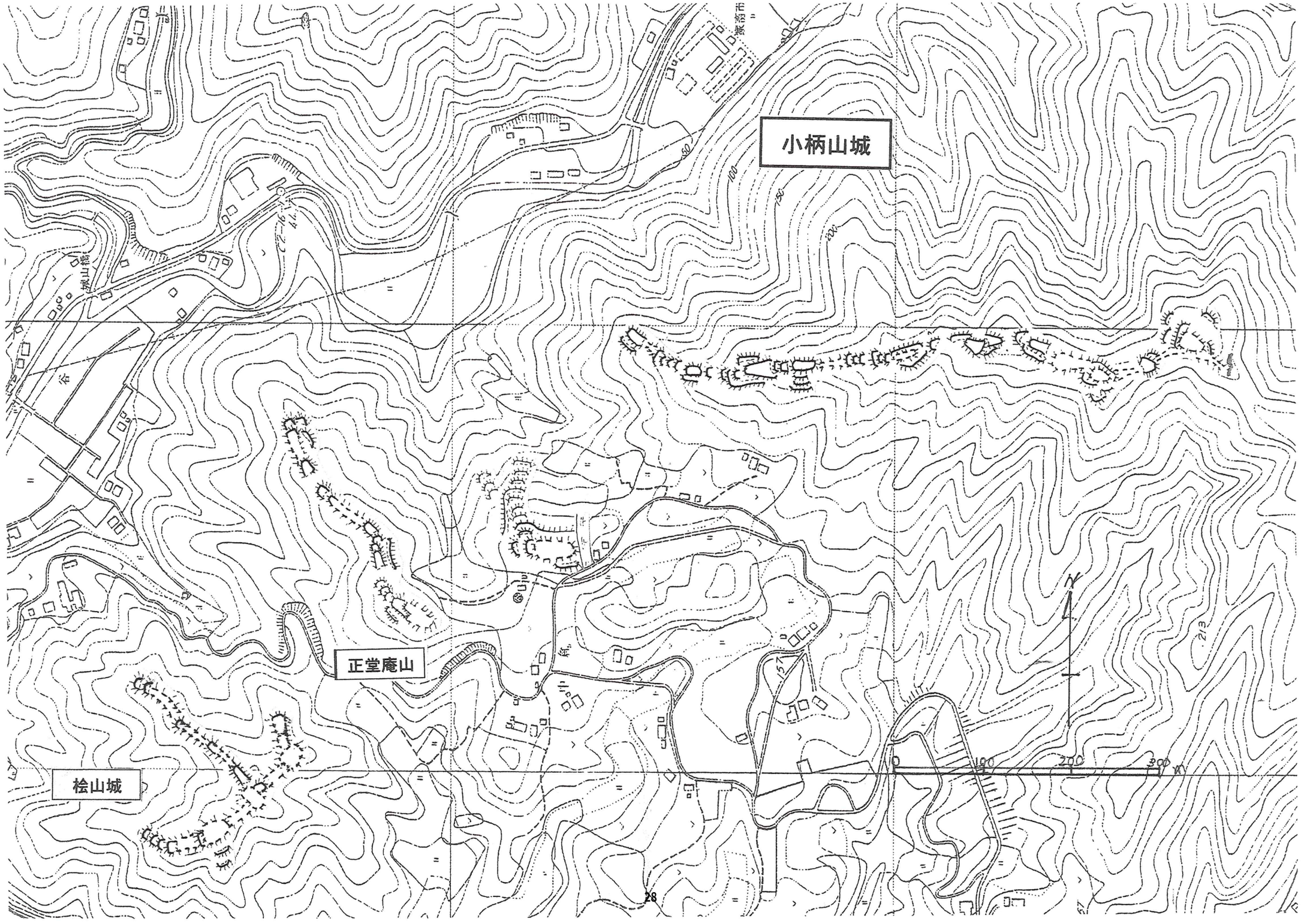


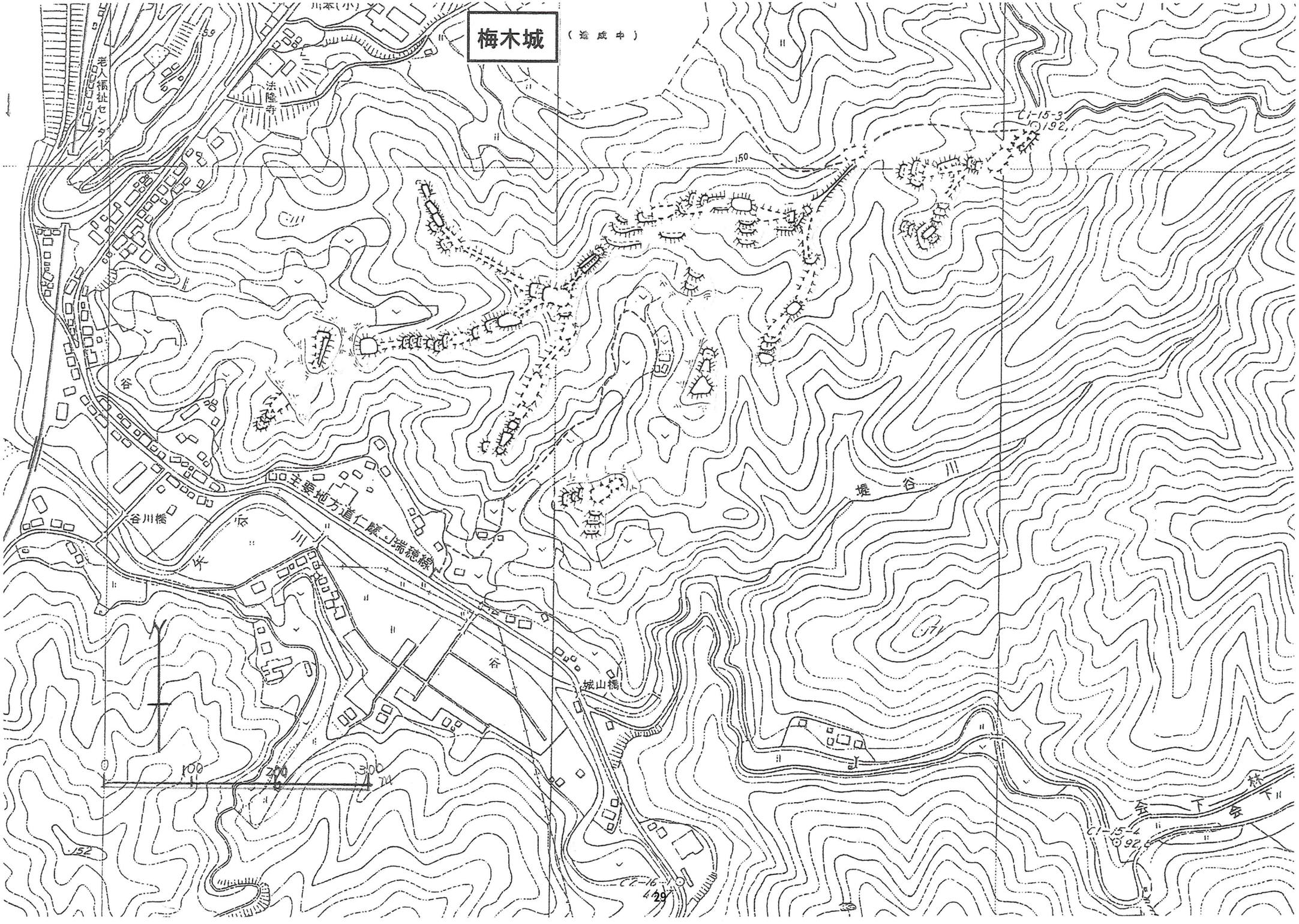
温湯城縄張図は島根県中近世城館跡分布調査報告書1
「石見の城館跡」より　一部改変


N
会下山城
国
有
会下林道
会下川
会下
92.6
長寺
172
258
250
300
200
150
100
26



畑野城
城山
390,6
C1-15-3
192,1
150
195
256
250
200
150
堤谷川
会下林道
会下川
C1-15-4
92,6


小柄山城
正堂庵山
桧山城


梅木城
（造成中）
老人福祉センター
法隆寺
谷川橋
城山橋
堤谷川
0
100
200
300
m

小笠原氏と日出城（出雲市湖陵町）

小笠原氏の神西移住

周知のように小笠原氏は、天正 19 年に転封を命じられて三原丸山城を下城するとともに、所領を削減されたうえ二カ国に分断されることになった。つまり、長門国阿武郡に三百石余を得て毛利氏に対する公役を勤めることとなった小笠原長親（父元枝が後見）の系統と、出雲国神門郡に二百石余を与えられた長旌の系統とにである。小笠原長旌夫婦は、翌天正 20 年に子息千代童をともない、賄領として五百石に加増された神西に転居した。

湖陵町三部の日出城跡は、神西に移住した小笠原氏の居城と伝えられている。この伝承を記録しているのが、三部八幡宮の神主家糸賀家に伝えられた「神門郡横尾山日出之城主小笠原在居及び後胤末裔記録」である。序文・跋文もなく成立時期も不明で、旧下古志村の高見氏を中心として小笠原氏の末裔とされる家系を記した古記録である。表題に日出城主とあるだけで築城や入城の経緯の記事はない。

日出城の構造と機能

日出城跡は、神西湖西岸の水田地帯に向けて南西側から突き出した丘陵の突端に位置している。東側の姉谷、西側の後谷に挟まれたこの低平な丘陵は、Ｌ字形をなしていて、城跡の南方約 500 メートル地点にＬ字形の屈曲点があり、ここがピークとなっている。しかしそれとても標高 48,3 メートルしかない。そこからＬ字形の頂点に位置する当城跡に向けて緩やかに下る傾斜の途中に三カ所の高まりがあるが、いずれにも普請の痕跡はない。地元では、Ｌ字形の足にあたる丘陵の中腹にあった平場が日出城跡と言い伝えられているが、湖陵中学校の校地を造成するための土取り場として掘り崩されて痕跡はなく、尾根筋にも普請の痕は認められない。

つまり日出城は、神西湖岸の低丘陵のうち、キリキリ鼻と呼ばれる突端のわずかな高まりを選んで普請が施されているのである。主郭の標高は 16 メートルで、東側を走る市道三部・砂子・大池線からの比高はわずか 14 メートルしかない。

日出城は基本的に単郭の城である。主郭は地形に合わせて不定形であるが、曲輪上面は平滑に削平されている。東側のほぼ中央に坂虎口（付図 a）があり、下りの通路は南側に回りこむように延ばされている。北方と東西両側の法面は、急角度に削り落とされた切岸となっている。南側には西側（湖陵小学校側）に一段、東側に三～四段の区画が認められる。それぞれの段差は１～２メートル程度であり、主郭と同様に水平に削平されている。最上段の区画（付図 b）と主郭の南西端とは１メートルの切岸で隔てられているだけだが、南側は斜面を削り込んで造成されている。したがって、ひな壇状のこの段差は、背後の 44.3 メートルのピークとの間の堀切の機能を持たされたと考えられる。なお先に述べたように、約 30 メートルの標高差のある背後のピークにも普請の痕跡はない。

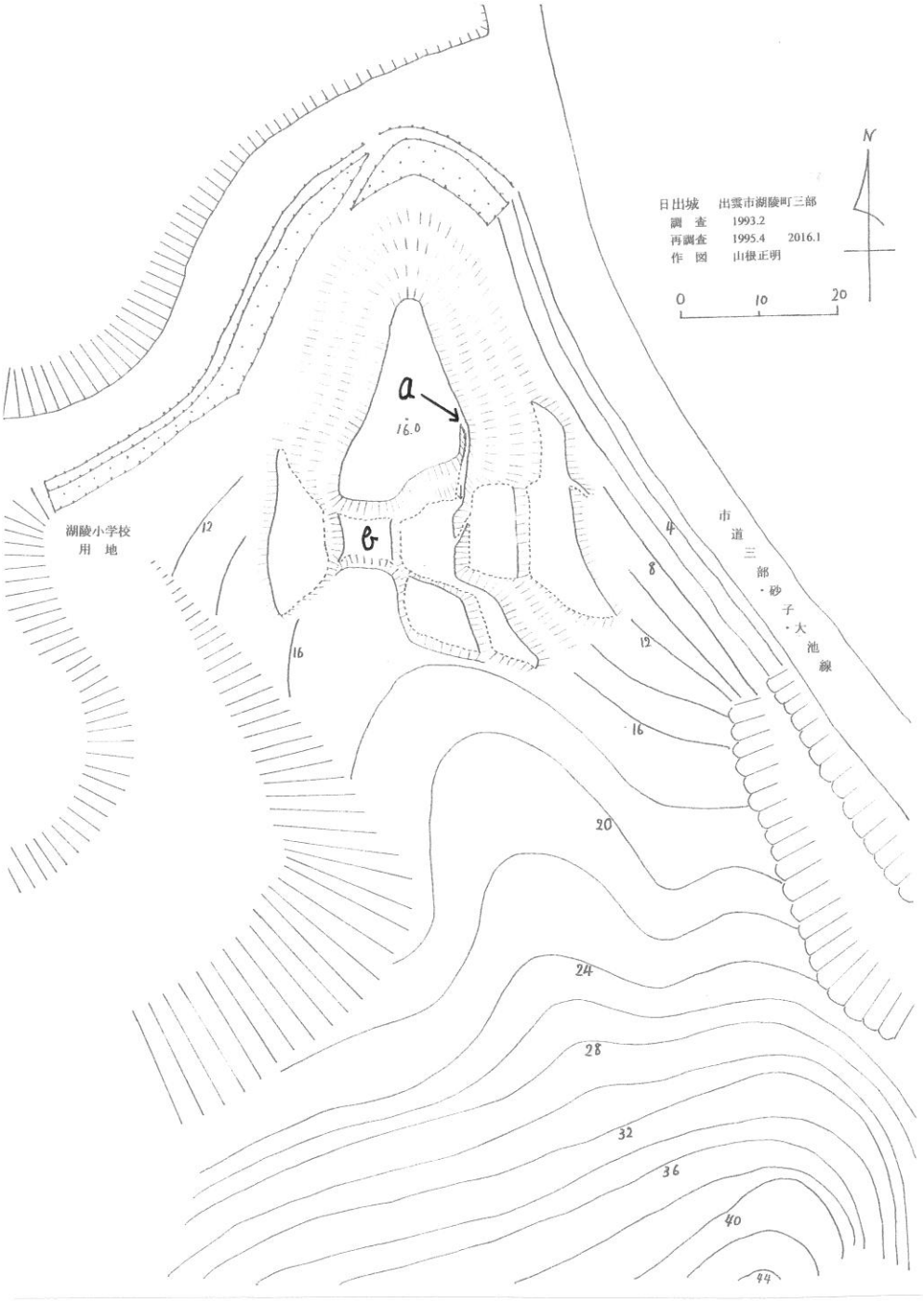
このような日出城の構造と周辺の地勢を考えると、当城は恒久的な城館として築造されたのではなく、軍事的な緊急性にうながされて急ごしらえで築造された広義の陣城と考えられる。神西湖に向けて突き出した丘陵の突端であることから、姉谷や後谷から神西湖に向かう、あるいはその逆の場合にも、兵員や物資の移動を警護したり掣肘を加える位置にあることから、繋ぎの城の役割を持たされたのではあるまいか。つまり、背後の低平な丘陵上やその裾の部分、あるいは現在浄土寺や本要寺の境内となっているＬ字形に囲まれた谷あいなどが駐屯空間として利用され、その番将の駐屯地が日出城だったのではあるまいか。

したがって、重要な交通路に面した繋ぎの城としての古城山城（比高 20 メートル　松江市

東出雲町出雲郷)や海部城(比高 12 メートル　松江市宍道町佐々布)などと共通する性格を認めることができよう。なお、雲芸攻防戦と尼子家復興戦の両度にわたって毛利勢に重用された神西城跡は、当城の東方約 2.3 キロメートルに広がっている。

日出城跡と小笠原氏

以上述べたような立地や縄張りあるいは普請から見て、日出城は雲芸攻防戦か尼子家復興戦の時期に毛利勢によって築造されて繋ぎの城として利用されたもので、神西移住後に小笠原氏が築城して居城としたとする伝承には従いがたい。



日出城縄張り図

４．丸山城関連石造物調査

経緯

今回の丸山城跡の調査を計画する際に、発掘調査以外で可能な考古学的調査を検討したが、周辺踏査は吉川正氏によってすでに試みられていたため、中世城郭の調査で通常実施される石造物（石塔）調査を検討した。丸山城が所在する三原盆地には、周知の中世石塔は知られていなかったため、地元在住の湯浅課長と元調査員の森口氏に照会したところ、丸山城跡の東南麓の街道沿いに石塔群が存在しているとの情報を得ることができた（調査後に、近隣の他の箇所でも石塔が存在しているとの情報を得ている）。

その場所は小字「大竜寺」にあたる山林で、平成９年発掘調査報告書(1)で井上氏が指摘した江戸時代の『岩見巡見』に登場する「大流寺山」に該当すると考えられた。『岩見巡見』は、幕府の巡見使が当地を訪れる際に、この一帯の説明を行うための資料とされ、江戸時代の地元認識を示す貴重な史料である。報告書の井上氏の記述には、

「大流寺山と云所、大楾之根五輪之塔計残る。墓七ッ有之。是小笠原世代之人。天正十一末従、此所城地ニ成。後、文禄四年末、雲州ニ而十五代目死去。世代墓ニは無之。家内之墓可成哉。」と記されているように、かつては小笠原氏の菩提寺として大きな勢力を誇った大竜寺さえ、丸山城の廃城にともなって銀山に移され、三原には地名と五輪塔（現在は存在しない）だけが残るという、直接現在につながる景観を現出した様子がうかがえる。

とあり、この寺院が丸山城と関係の深い寺院であることがわかり、今回の調査を実施するきっかけとなった。

なお、平成９年段階では石塔は未確認であったらしいこと、さらにその後の石見銀山遺跡にある移転後の大龍寺跡の石造物調査(2)により、天正十年の紀年銘のある開山塔（現在の地名は大龍寺跡であるが、石塔には「大竜寺」表記）が発見されたことにより、大竜寺の移転は丸山城廃城後ではなく、築城の前年である可能性が強いとされた。

石塔群の調査

調査は、平成 28 年２月３日に石垣調査と同じメンバー（湯浅、森口、椿）で実施した。1月の大雪が残っている中、気温も低く短時間の調査であったが、想定以上の成果が得られた。

県道から鉄穴流しの切り羽が残る丘陵尾根を越えると、小さな谷の南斜面に幅 20m、奥行き３～４ｍの平坦地があり（第１図）、７～８基の石塔を確認できた。うち６基は、原位置かそれに近い位置に立っており、一点の五輪塔片（空輪）以外は全て法篋印塔であった。現況の写真撮影を行った後、うち６基を略測し、これに伴う基壇１基を実測した（第２図）。石塔群に向かって左（北）から順に１～８号の名称を付して以下説明する。

なお、境内地の様子については、積雪のため部分的な踏査しかできなかったが、上記の平坦地以外にも谷奥に加工段が見られ、うち１箇所は５ｍ四方の平坦地に径１ｍほどの集石を２箇所確認した。集石の近くには法篋印塔の塔身部が１基確認でき、本来は石塔が立っていた可能性がある。また、周辺は鉄穴流しと見られる地形改変が著しく、本来の境内地がどの程度残っているか再調査の必要がある。

１号石塔

横転した法篋印塔の相輪部が１基確認できた。笠部以下は付近に埋没している可能性が高い。相輪は上下に２本の突起を回らせ、蓮弁飾りのないものである。笠部との接合用の突起

も完全に残っており、風化もほとんど見られない。石材は白っぽく、凝灰岩のように緻密で角礫は含まず、硬質なものである。この石材は専門家の検証を経る必要があるが、石見銀山の石塔調査関係者に写真を見せたところ、おそらく温泉津産の「オオハタ石」ではないかという所見であった。オオハタ石は、現在も流通している福光石の産地近くで産出する石材で、具体的な産地は明確にされていないようだが、石見銀山遺跡の戦国期石塔の石材に多用されていることが近年明らかになりつつあり、注意すべき石材と言える。

２号石塔

相輪と笠部が立ったままの状態であり、身部以下は埋没している可能性が高い。相輪はややズングリとしているが、基本的に１号石塔と同様な造りである。笠部の立ち飾りはやや外開きで小型である。

３号石塔

相輪と笠部が立った状態で残り、身部以下は埋没している可能性がある。規模は最も小さく、笠部は幅に比して高さの低いタイプである。

４号石塔

これも相輪と笠部が立った状態で残り、身部以下は埋没していると考えられる。相輪の形態・規模は１号石塔に近く、飾りはないが６号石塔のバランスに近い。

５号石塔

これも相輪と笠部が立ったままで残り、身部以下は埋没していると考えられる。相輪はやや細身で、笠部もやや低い形態である。笠部の立ち飾りには線刻の蕨文が確認できる。

６号石塔

今回調査した中で最も残りの良い石塔で、二段築成の基壇中央に立っており、建立当初のままであると考えられる。相輪は他と異なり線刻による５段の輪が表現され、下段突帯の上部に６葉の蓮弁飾りが施されている。笠部は下面に一辺６葉の蓮弁が精緻に表現され、立ち飾りには蕨文が刻まれている。塔身部は幅に比して高さが低い横長タイプで正面中央に円形介線に囲まれた梵字が刻まれている。基部は埋没しているが、今回唯一確認できた。上面は二段に造られ、下段縁辺部には上方から見える蓮弁飾りが一辺に８葉が丁寧に造り出されている。

基壇は１辺約３ｍあり、二段築成である。かなり崩落しているが、本来の規模・形態を留めており、中世石塔としては貴重である。

７号石塔

今回実測できなかったが、法篋印塔の相輪と笠部が立った状態で残っている。身部以下は埋没していると考えられる。型式は４号石塔に類似する。

８号石塔

法篋印塔の相輪と、今回唯一確認された五輪塔の空輪が各１点と、これらの部材と考えられる破片が集中している。元位置は不明であるが、平坦地と他の石塔との距離関係から、この付近に存在していたものと考えてよいであろう。

小　結

三原大竜寺跡の石塔群は、銀山に移転後の大龍寺の石塔群よりは古い型式で、時期的な重複もしないと考えられ、「移転」と矛盾しない。

①石見銀山の戦国期の組合式法篋印塔は、２系列あり、大龍寺跡の石塔群はそのうちの１系列のみが確認されている。三原大竜寺跡の石塔群もそれと同系列と考えられ、両者は

同一の流通ラインによっている可能性がある。

⑥また、毛利期の石見銀山城下町エリアでは、組合せ式（大型品）が多数みられるが、鉱山エリアでは、一石造りがほとんどで、両者の石塔には格差があると言える。これは、石塔建立者の階層を反映している可能性があり、そうだとすれば銀山大龍寺（臨済宗）は、上位階層の寺院と位置付けられる。

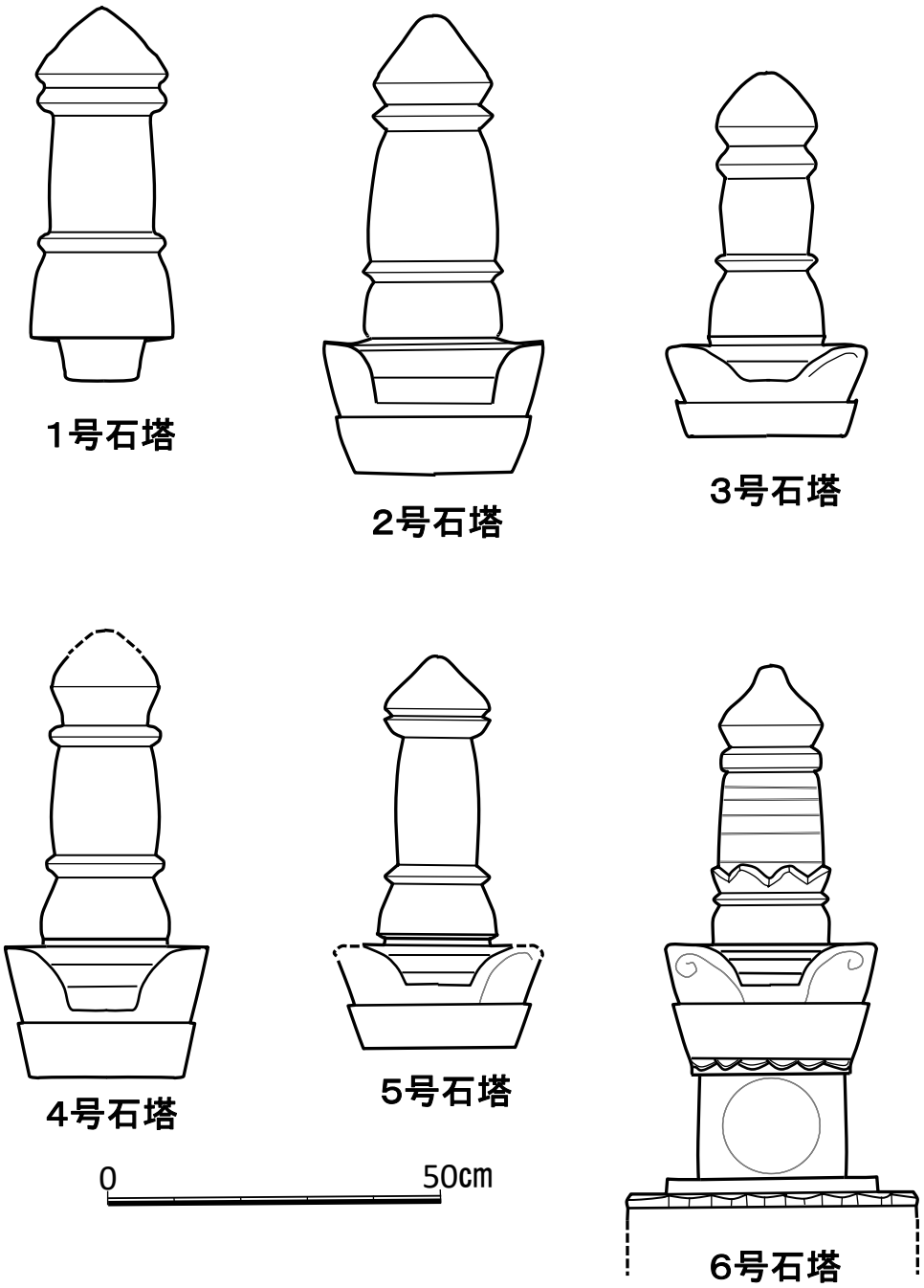
⑦以上のことから、文献（伝承）にある三原大竜寺の銀山移転は、考古学的に矛盾せず、むしろ極めて真実性が高いと考えられる。さらに移転先が毛利期の支配中枢エリアであることや、上位階層の石塔であることから、毛利（吉川）氏と小笠原氏の関係性が反映されている可能性を検討すべきだろう。

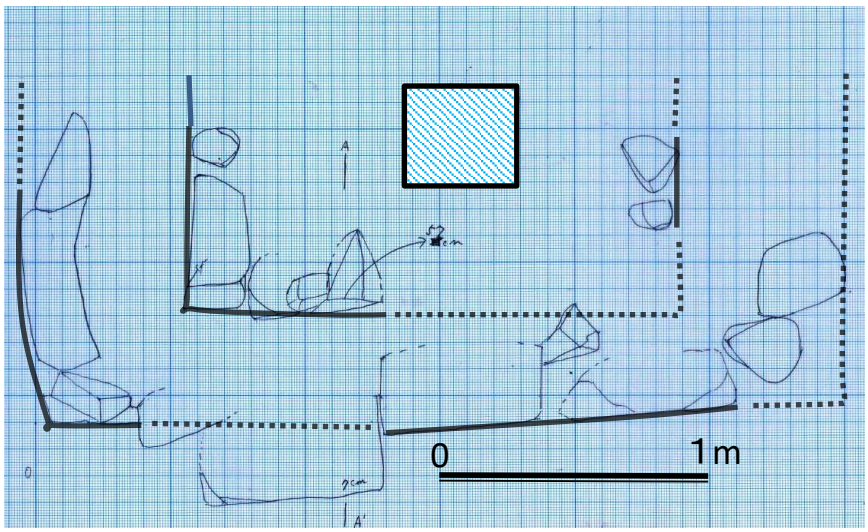
＜参考＞『石見巡見』記載の該当部分の現代語訳（括弧内は筆者説明）

「大流寺山という所、密教の根本である五輪の塔ばかりが残る。墓は７つある。これは小笠原時代の人(の墓)である。天正十一年末（1583 年末は、『丸山伝記』では丸山城築城開始の時期）まで、この辺りは城地（丸山城入場以前の城館か）であった。その後、文禄四年（1595）末に、雲州にて十五代目（小笠原長旌）は死去した。この世代墓（大竜寺石塔群）の中にその墓は無い。家内（奥方）の墓はあるかもしれない。」

(1)井上寛司「石見小笠原氏と三原丸山城」『中世城郭発掘調査報告書 石見小笠原城郭丸山城跡』1997 年 3 月、川本町教育委員会

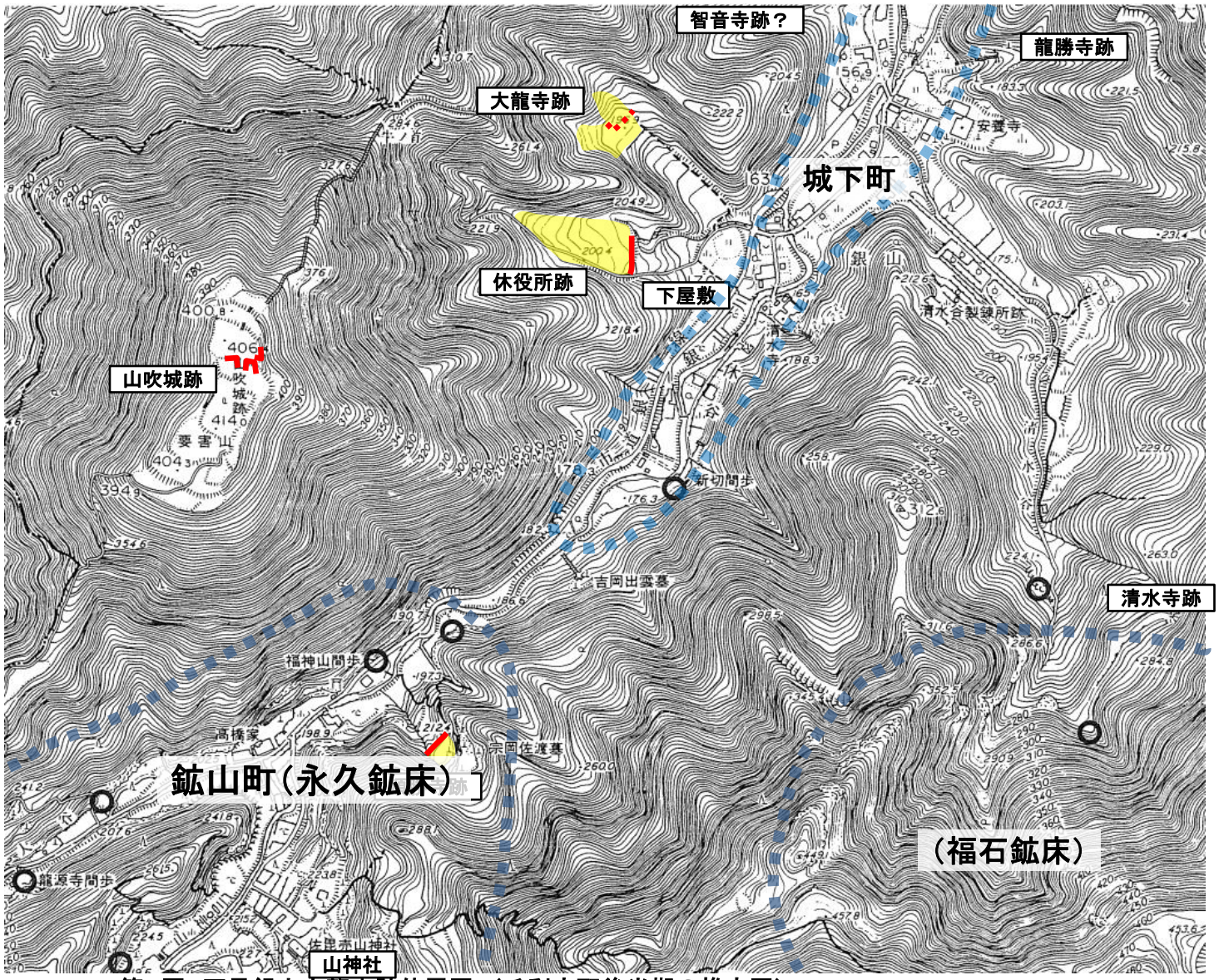
(2)『石見銀山遺跡石造物調査報告書３［安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外］』2003 年 3 月、島根県教育委員会・大田市教育委員会



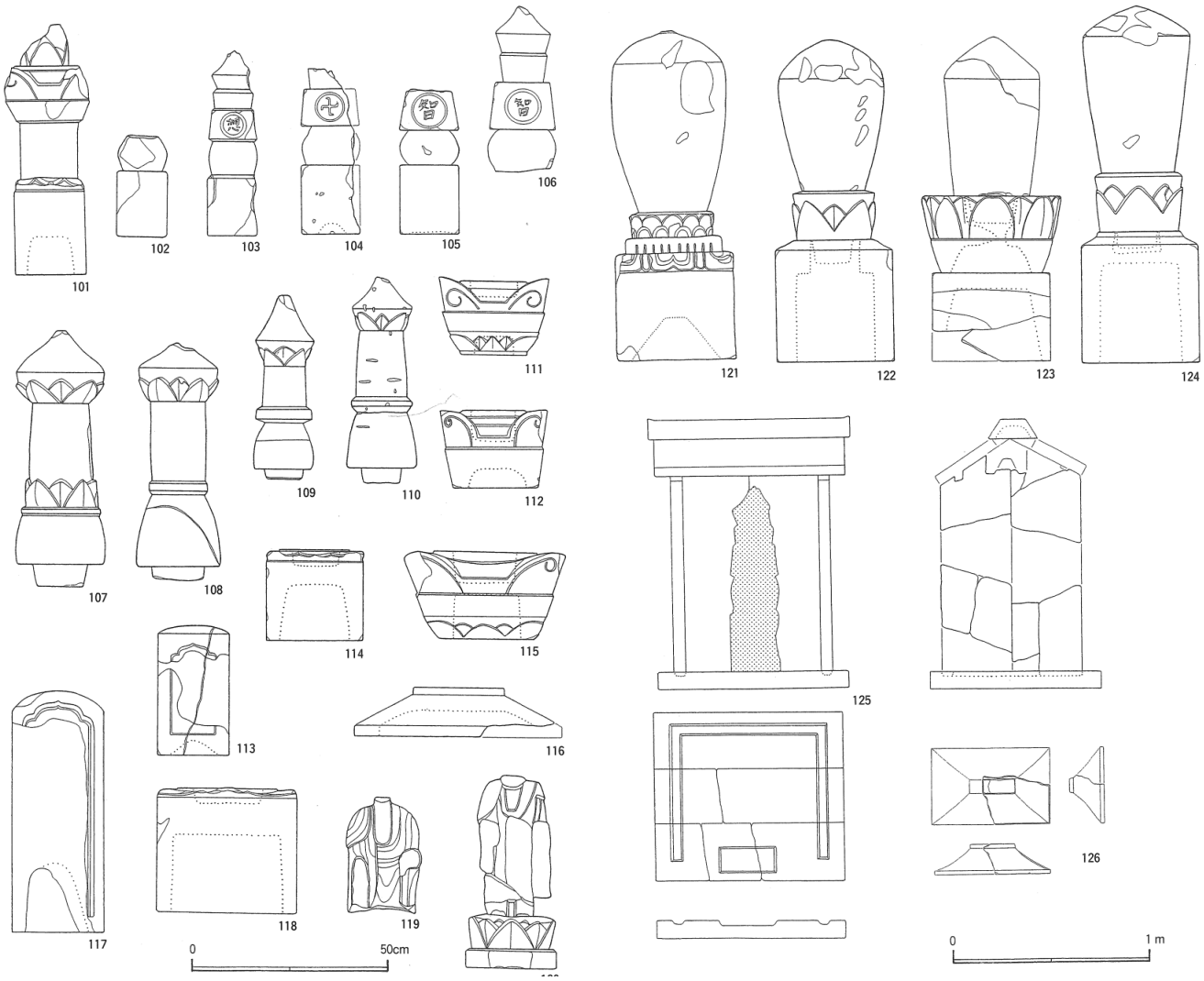


6号石塔基壇石列平面図

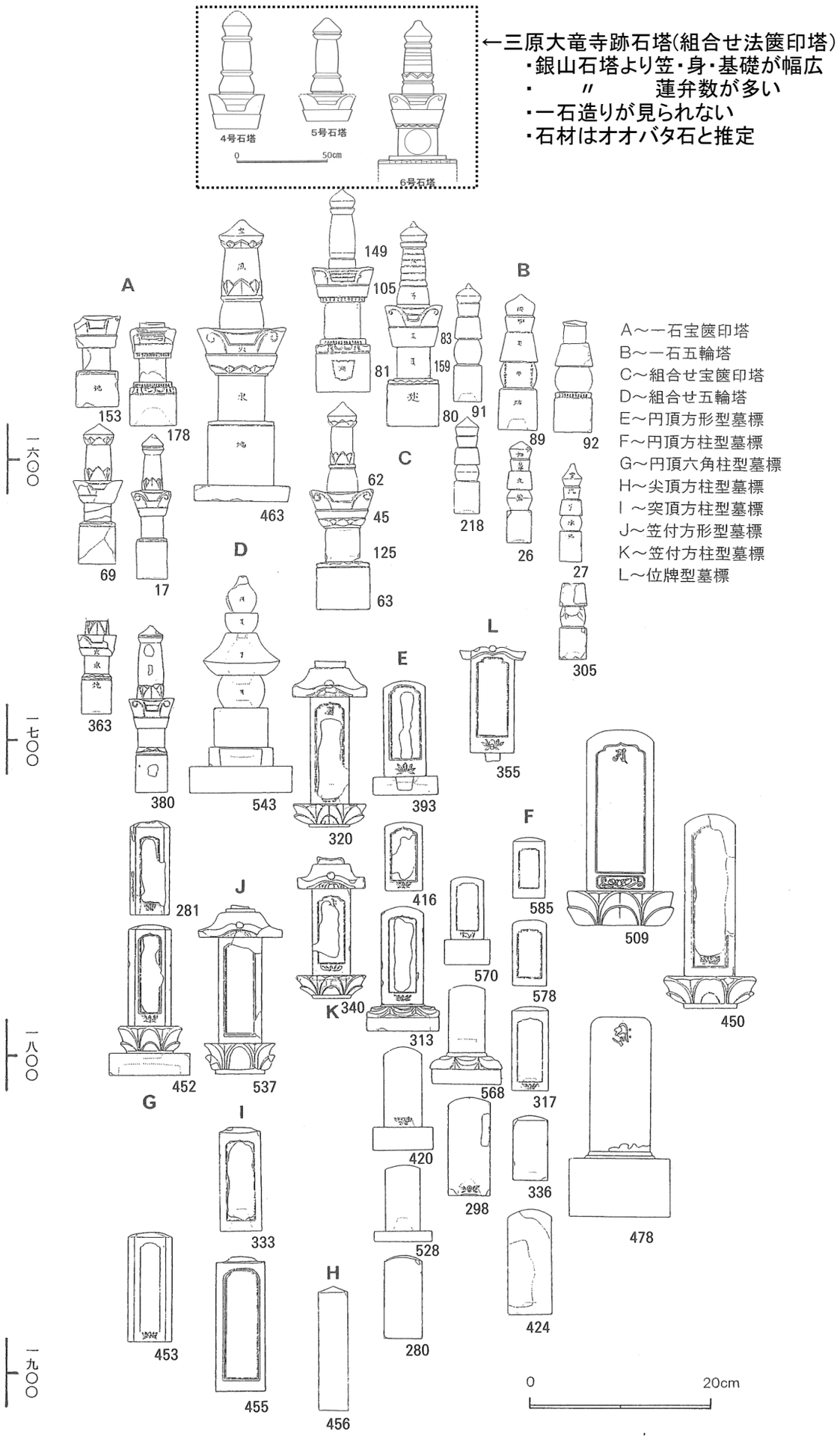
第2図　三原大竜寺跡石塔略測図



第3図　石見銀山大龍寺跡位置図 （毛利支配後半期の推定図）



第4図　石見銀山大龍寺跡石造物実測図 （121が天正十年開山塔）



石見銀山遺跡(龍昌寺跡)の石塔・墓塔変遷との比較図(石見銀山石造物調査報告書より転載改変)

文献所在調査について

川本町教育委員会

川本町教育委員会では、平成５３年８月に町内の古文書の所在を調査し調査カードを作成しており、当時の調査内容は以下のとおりである。

島根県古文書等所在確認調査　s53.8

	所　在	住　　所	文書数	調査文書	内小笠原関係	備　　考
1	全長寺	川本町川本市井原	16	9	7	桃山～江戸期
2	平田家	川本町田窪	346	19	18	小笠原氏の感状 年貢関係の文書 村方文書、たたら関係 戦国～江戸期
3	武明八幡宮	川本町三原	253	39	19	神社関係の文書
4	塚田家	川本町小谷	128	-	-	村方文書 小笠原庄屋だった関係 上ほとんどが村方文書
5	三上家	川本町川本	96	-	-	石見銀山料、村役人
6	法隆寺		73	-	-	

調査付記

川本町因原　中垣宣弥氏及び川本町南佐木　平田享道氏所蔵の文書については所有者の都合で期間内に調査することができなかった。

中垣家の文書は「川本町誌」歴史編に一部収められている。旧浜田領因原村の庄屋で所蔵文書はかなりあることが予測される。

平田家は南佐木村（石見銀山料）の庄屋の家で「たたら」を盛大に経営されていたからその関係の文書があると思われる。

旧町史に川本町三原の荘厳寺文書の記載があるが、既に腐食して今日では見ることができない。